

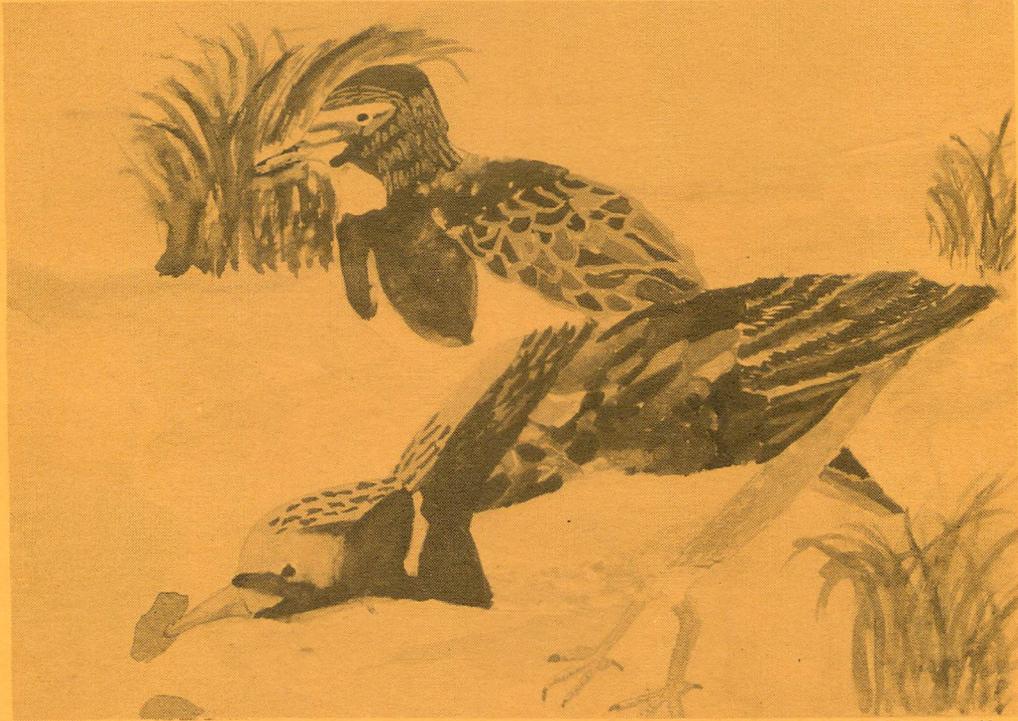
38号

# 愛鳥教育

1991.10



全国愛鳥教育研究会



秦野市立北小学校6年 桐山 麻美

# 愛鳥教育

No.38  
1991.10

## 目次

巻頭言	江袋島吉	3
ウトナイ湖・野幌森林公園夏期研修会報告		
概要	岡本嶺子	4
愛鳥教育実践発表		
「豊かな心を育み実践力を培う体験学習の実践から」	石山博之	5
「野鳥に学ぶ自然保護の実践」		
	長谷川順一・梶浦孝純	8
「小鳥さんがプレゼントしてくれた自然との出会い」	広瀬恵子	12
講演「私の愛鳥教育」	三浦二郎	14
講演「巨視で見る北海道の動物相」		
	金井郁夫	17
愛鳥教育に関する質疑応答		
「レベルアップ愛鳥教育活動」より		
	杉浦嘉雄	21
フィールド紹介		
“野幌森林公園”と“ウトナイ湖”		
	杉浦嘉雄	22

## 愛鳥教育実践講座Ⅲ

「子どもたちの愛鳥活動を支えるもの」

渥美守久 24

## 論説

「学校教育で何ができるのか。何をやるのか。」

平田寛重 30

むらの理科ことはじめ(11)

「台風ものしり帳」

金井郁夫 31

各地の話題

「神奈川県野生生物保護実績発表大会を見て」

平田寛重 32

愛鳥活動のヒント

「グリーン・マークを活用しましょう」

平田寛重 33

インフォメーション

「BOOKS 愛鳥教育・環境教育に参考になる雑誌」

杉浦嘉雄 34

事務局日誌

岡本嶺子 35

編集後記

岡本嶺子 35

「愛鳥教育No.40」の会員からの活動記録の投稿

について

全国愛鳥教育研究会事務局

愛鳥クイズ

36

# ウトナイ湖に学ぶ

夏期研修会に想う

全国愛鳥教育研究会会長 江袋 島吉

◇ 夏期研修会— 8月6・7日 ウトナイ湖—  
既報の夏期研修会は、地元北海道の方々のご協力によって、無事終了することができました。

研修会の詳細については別項に譲りますが、研究協議の席上、ご発表になられた2校1園の貴重な実践報告には、学ぶ点が沢山ありました。

厚床小学校の場合は、教育目標の具体化という学校教育の本筋にしたがって、地球環境を生かした体験活動を重視し、愛鳥・栽培の自然愛護活動に、ボランティア活動をリンケージさせて、3本の柱を構成の上、総合的・体系的指導を展開しているところが、強く印象に残りました。

藤の沢小学校は、近隣の“小鳥の森”（周辺の緑を守る目的で、30余年前に設定）の自然を保護するために、愛鳥教育を基盤に据え、地元住民と一体となって続けてきた特色あるケースだけに、ビジョンとする“愛鳥愛村”“愛鳥愛人”の言葉が、実感をもって、胸に迫ってくるものがありました。

いしやま中央幼稚園の実践に、初めて幼稚園の愛鳥教育に接した私は、新鮮な感動を覚えました。

巣箱の架設、餌の栽培、餌づけ、観察記録など、まさか幼稚園段階で……と、従来考えていたことが覆された思いに、しばし浸ったものです。

また、本教育によって培われた心情は、生涯心のどこかに生き続けることを思うとともに、せっかく育った芽が途切れることなく、学校教育においても、適切な指導が継続されるよう、新学習指導要領や環境教育指導資料の運用に、大きな期待を寄せるものです。

◇ 北海道のみなさん、ありがとうございました。  
本研修会にあたって、絶大なご協力を賜った北海道のみなさんに、改めてお礼を申し上げます。特に、全体を統轄された柳沢信雄支部長並びに

全般の企画運営に任せられた水崎満校長の両先生には、満腔の謝意を表する次第です。

また、実践報告の労にあたられた石山博之校長、長谷川順一、梶浦孝純、広瀬恵子の各先生、貴重な体験を披露された三浦二郎氏、鹿島椋策氏、ご案内ご指導を頂いた大畑孝二、安西英明、富川徹、小畑淳毅の各氏、庶務にご尽力を頂いた塚原英代先生、施設の利用の便を図られた油津雄夫、門崎允昭の両氏、会を盛んにして下さった佐々木武巳、上坂登両先生、赤石誠二氏、その他、ご協力頂いたみなさんに、厚くお礼申し上げます。

◇ 流れはどこへ— 千歳川放流計画—

研修期間中、たまたま北海道新聞所報の“流れはどこへ—千歳川放流計画—”（前号“ウトナイ湖が危い”参照）の記事に接することができました。

それによると、計画推進派の運動も強力で、まったく予断を許さない状況にあるとのことでした。

この機にあたって、日本野鳥の会では、10月の新聞に意見広告を出して、道民の関心を深めるべく準備中で、資金のカンパも行っています。

今回お世話になった大畑孝二チーフ・レンジャーも、「問題は、自然保護が開発か……の選択ではなく、治水対策が本当に放水路しかないのかの点にある。」と協調されていましたが、野鳥の聖地ウトナイ湖、また、美々川の清冽な流れを守るために、私も微力を尽くしたいものと考えています。



# ウトナイ湖・野幌森林公園夏期研修会報告

全国愛鳥教育研究会常務理事 岡本 嶺子

## 〈概要〉

1991年夏期研修会は、8月6日(火)～7日(水)、地元北海道支部の協力を得て、苫小牧市のウトナイ湖と札幌市の野幌森林公園を会場に開催しました。

一日目は、地元北海道の小学校・幼稚園の愛鳥教育活動の実践発表、愛鳥教育活動のヒントの発表、北海道の愛鳥教育の大家である三浦二郎先生の講演、ウトナイ湖サンクチュアリの見学とスケジュールが続きます。

夕食後は、ディスカッション「レベルアップ愛鳥教育活動」を行い、熱心な議論はその後の懇親会に引継がれ、夜の更けるのも忘れるほどでした。

二日目は、ウトナイ湖ネイチャーセンターの周りで早朝探鳥会を行いました。繁殖期が終わっていたこともあって、たくさんの野鳥と出会うことはできませんでしたが、エゾセンニュウやシマエナガなどを観察しました。エゾセンニュウは「トッピンカケタカ」と鳴きます。トッピンというのは鍵という意味で、鍵を掛けたかと鳴いているのだそうです。おもしろいききなしだと思いました。

朝食後、北海道野幌森林公園へ移動し、公園事務所の小畑主事の案内により、自然観察を行いました。広い敷地と豊かな自然は、本当にすばらしいものでした。

午後は、同公園の開拓記念館講堂で、本会副会長の金井郁夫氏の講演でした。

30名の参加者を得て、愛鳥教育の進め方や自然観察についての意見交換ができ、また親睦が深められて、大変有意義な研修会になりました。

以下は、研修会当日のプログラムです。

## 8月6日(火)

### 開会挨拶

全国愛鳥教育研究会会長 江袋島吉氏  
全国愛鳥教育研究会北海道支部長 柳沢信雄氏  
愛鳥教育活動の実践発表

「豊かな心を育み実践力を培う体験学習の実践から」

根室市立厚床小学校校長 石山博之氏

「野鳥に学ぶ自然保護の実践」

札幌市立藤の沢小学校教諭 長谷川順一氏

「小鳥さんがプレゼントしてくれた自然との出会い」

いしやま中央幼稚園教諭 広瀬恵子氏

愛鳥教育活動のヒント

「野鳥マップを作ろうよ」

全国愛鳥教育研究会常務理事 島田利子氏

「テグス回収活動」

全国愛鳥教育研究会常務理事 杉浦嘉雄氏  
講演

「私の愛鳥教育」

樽前自然教育研究所主査 三浦二郎氏

ウトナイ湖サンクチュアリの見学

案内 ウトナイ湖サンクチュアリ・フレンジー 大畑孝二氏  
ディスカッション「レベルアップ愛鳥教育活動」  
懇親会

## 8月7日(水)

### 早朝探鳥会

案内 (株)たく  
ぎん総合研究所  
環境調査室 主任  
研究員 富川徹氏  
野幌森林公園 野  
外実習及び探鳥会

案内 北海道野幌森林公園管理事務所 公園利用課主事 小畑淳毅氏

講演

「巨視で見る北海道の動物相」

全国愛鳥教育研究会副会長 金井郁夫氏



野幌森林公園野外実習風景

# 豊かな心を育み実践力を培う体験学習

根室市立厚床小学校校長 石山 博之

## 1. 本校の概要

北海道の東端に根室市があり、厚床は根室市の玄関口にあって、市の中心より33km西方に位置する。そして、根室、釧路間の大動脈である国道44号線が学校の前を通り、中標津、羅臼へいく国道243号線の分岐点でもある。

本校は、かつて馬市場がたち、鉄道官舎が並んだ国鉄の合理化前は240名を越す児童数も語り草となり、現在は5学級複式校となっている。

校下は、酪農が中心であり、父母の職業も酪農、そして関連企業(明治乳業)の会社員、漁業、商業、その他の順となっている。父母や地域の教育に対する関心は高く、学校行事などには積極的に参加し、子供のためには労を惜しまない。学校周辺は自然に恵まれ、裏に学校林があるため動植物、昆虫などの観察に有効に活用している。

## 2. 体験学習(愛鳥活動、ボランティア活動、栽培活動)の歩み

○昭和61年 学校林散策中ゴジュウカラの営巣を児童が発見。愛鳥活動が始まる。

○昭和63年 北海道生活環境部より愛鳥モデル校の指定を受ける。

- ・愛鳥活動(探鳥会、巣箱かけなど)
- ・根室複式連盟交流研究会(地域教材の活用としての愛鳥活動)

○平成元年 北海道ボランティア振興協会の指定を受ける。

- ・ボランティア活動研究実践公开发表
- ・愛鳥活動
- ・「野鳥と楽しむ会」を設立 父母、地域の人、教師 52名
- ・西別岳探鳥登山及びゴミ拾い活動
- ・老人会との清掃活動
- ・植樹祭 赤えぞ松 50本 とど松 50本
- ・根室市花一ぱい運動表彰(1回目)
- ・道野鳥絵画展 銅賞 2名 佳作 2名

○平成2年 愛鳥活動

- ・老人会との交流(運動会、敬老参観日、ゲートボールなど)
- ・道野鳥絵画展 銀賞 1名 佳作 1名
- ・遠足による探鳥活動と清掃活動
- ・ " 遺跡学習(自然保護・文化財調査委員と共に)
- ・根室市花一ぱい運動表彰(2回目)
- ・根室管内へき地複式教育研究会
- ・根室管内教育実践表彰を受ける。

○平成3年 愛鳥活動

- ・北海道知事より愛鳥モデル校の継続指定を受ける。
- ・遠足による愛鳥活動と清掃活動
- ・ " 遺跡学習(自然保護・文化財調査委員と共に)
- ・老人会・スズラン学園との交流(運動会)
- ・植樹祭 赤えぞ松 50本

## 3. 体験学習のねらい

活動内容を精選して、年間25時間実施している。

### (1) 愛鳥活動

野鳥とそれを取り巻く自然環境を教材として教育課程に組み込み、子供の望ましい変容を目指す。教育課程外の活動や教科、道徳、特別活動との関連を重視し、指導要領の範囲内で可能な限り野鳥との関わりを求める。

◆教科との関連～国語、理科、図工などの教科において、年間指導計画の中に位置づけて実践化を図る。

◆道徳との関連～愛鳥活動を道徳教育の実践の場として位置づけ、価値の自覚をより高め、実践の意欲と態度を養う。

◆特別活動との関連～愛鳥活動は地域の自然環境にはたらきかける体験活動である。児童会活動、学級活動、学校行事等で野

鳥との関わりを求める。

## (2) ボランティア活動

ボランティア活動は、学問や知識を生かす場であり、その活動を通して得られた人間関係や生きることの喜びは、学校の授業や生活の自発性と意欲を育てることにつながる。愛鳥活動、清掃活動、交流活動、収集活動等を行う中で、奉仕の精神のかん養を図る。

◎地域清掃活動～ビン回収およびゴミ拾い

◎敬老参観日～祖父母や地域の老人会の方を招き、昔の遊び・お話を聞く。

◎すずらん学園（精薄施設）との交流～運動会、学芸会などを一緒に行う。

## (3) 栽培活動

もの・仕事・人の大切さ等を勤労生産の体験を通して実感として心で受け止めさせ、豊かな人間性と正しい勤労感を育てる。

◎学校園づくり～たてわり班でも・まめなどの野菜の栽培、収穫祭、バターづくり（地域の人材活用）

◎ヒマワリ畑づくり～給餌台におく小鳥の餌となる。

◎学級園づくり～学級毎に工夫しての取り組み。

◎コスモスロード～国道の縁に作る。（根室市花一ぱい運動で表彰を受ける。）

◎植樹～学校林のそばに植える。など

## 4. 愛鳥活動について

### (1) 各教科、特別活動など

・図工の時間で愛鳥ポスターの作成、愛鳥カレンダーづくり、集会活動では鳥についてのクイズ、巣箱づくりなどを行っている。昼や帰りのときには鳥の鳴き声を放送している。

### (2) 探鳥会

・校舎の裏にある学校林を中心に、学校周辺や家庭において探鳥活動を続けている。今まで4年間に確認された鳥は数多い。（約90種）  
・単年度毎に確認された鳥の名前、発見者、月日、場所を「バード、ウォッチャー表」

に記録し、校内に掲示している。

・(財)日本野鳥の会根室支部主催による長節湖（ちょうぶしこ）探鳥会に、本年度も希望者児童、父母、教師にあわせて38名が参加し、36種の野鳥を確認している。

・教科指導で学校林に入った時や遠足のときなどを利用して観察している。

### (3) 巣箱の架設、清掃

・昭和61年度からの高学年の子供達が制作したもの、全校たてわり班で制作したものなど62種の巣箱を架設。それらのうち32個は学校林や学校周辺に架設した。その他は厚床市街地（保育所、神社境内、厚床会館、すずらん学園など）に架設し、秋には壊れた巣箱の架け替えや修理、清掃を行っている。

### (4) 野鳥ガイドブックづくり

・昭和62年度から6年生が愛鳥活動の継承を願い、卒業記念もかねて野鳥ガイドブックの制作に取り組んできた。鳴きかた、大きさ等が記載されており、毎年2月の一日入学の時に新1年生に手渡され、野鳥の入門書として喜ばれている。

### (5) 給餌台

・学校前の大きな松のそばに給餌台が設置されており、冬の餌の少なくなる11月上旬～4月下旬の間、パンくず、ヒマワリの種、あぶら身や果物を置いて野鳥が餌を食べられるようにしている。そして、野鳥の様子を観察している。

## 5. 集会活動（みどり集会）

・土曜日、自主性、豊かな心の育成を目指し全校集会活動（みどり集会）を実践している。

## 6. おわりに

まだまだ不十分な実践であり、多くの問題点を含んでいるが、気張る事なく、息の長い実践と地道な活動を進めている。

学校での愛鳥活動は、鳥についての専門家を育てるのが目的ではない。本研究会常務理事 平田寛重氏も「愛鳥教育 37号」に「野鳥の観察を通して、自然そのものや人間の生活を含めた環境の変化を見ていくことです。さらに、その活動で培われた感動や自然を見る目、社会を見る目が結果として生物系についての理解を生み、人と自然との一体感を持った自然保護の考えを養っていく」

「みどり集会」年間計画

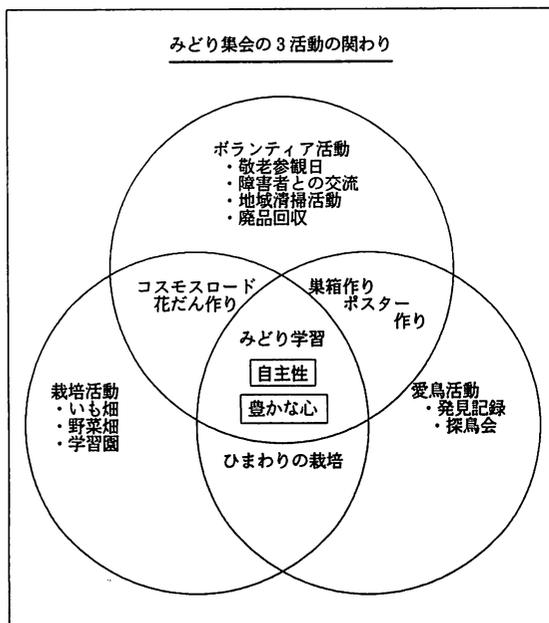
月	栽培活動	愛鳥活動	ボランティア活動	文化	体育	時数
4	○計画立案 (チーム)		発見記録 (年間)			1
5	○学校園作り ・土おこし・肥料はこび ・苗植え・うね作り	○ひまわり 畑作り	○愛鳥ポスタ ー発表会 <探鳥会>			3
6	・水やり ・草取り		宮巣状況確認	○運動会ポスター 作り	○なわと び大会	2
7	・土よせ			○全校空ビン回収 及び道路清掃	○七夕 集会	2
8					○夏休み 工作展	1
9	○いもほり			○敬老参観日		2
10	○バター作り ◎収穫祭		<探鳥会>			3
11	・学校園のかたづけ	○巣箱修理 (巣箱作り) 清掃・架設	○全校空ビン回収 及び道路清掃		○球技 大会	3
12						2
1		発見記録整理 新発見記録 開始		○冬休み 工作展		1
2		○愛鳥発表会		○カルタ 大会		3
3				○卒業生 を送る会		2
				合計時数	25単位時間	

※○：1単位時間、◎：2単位時間

委員会活動

委員会名	日常活動	担当集会活動
保健体育委員会 (保体委員会)	運動集会 うがい指導 掃除点検 等	校舎内外清掃 なわとび大会 球技大会 空ビン回収
文化委員会	読書啓蒙・本の貸出 校内放送 掲示物管理 等	七夕集会 作品展発表集会 カルタ大会
緑化委員会	飼育動物の管理 農園や栽培植物 野鳥確認記録 学校林・巣箱	いもうえ集会 愛鳥ポスター発表会 愛鳥発表会 ひまわり畑づくり
書記局	委員会活動の調整 校内生活の問題 代表者会議の運営 夏休み冬休みのきまり	春の小運動会(行事) 運動会ポスター 宿泊学習(行事) 敬老参観 収穫祭・収穫行事 学芸会ポスター もちつき大会 まめまき集会

みどり集会の3活動の関わり



と、述べている。正にその通りであり、究極的には「生命尊重」という大きな命題に結びついて行くと考えている。

私達も、五感を通して(体験学習)感動し、思考し、理解し、実践するというステップを大事にし、これからも歩み続けたいと思っている。

# 野鳥に学ぶ自然保護の実践

札幌市立藤の沢小学校 長谷川順一・梶浦孝純

## 1. 小鳥の村の自然

札幌市の南南西、中心部より12kmのところの位置する本校を取り巻く藤の沢地域は、支笏火山噴出物豊平浮石部層といわれる火山灰や火山砂が蓄積し、固まった凝灰岩によって丘陵地帯が造られている。

本校の愛鳥教育が進められている「小鳥の村」は、藤の沢の中央を流れるオカバルシ川の東部で藤野マスナル(317m)の裾に位置し、約9haに亘って南北に細長く広がっている。

ここは、カシワ・カツラ・カラマツ・クリ・シラカンバ・コブシ・ハリエンジュ・ミズナラなどの広葉樹木や針葉樹木が多種多様においしげり、その中に棲む野鳥や小動物・昆虫などにとっては、繁殖・活動・休息の絶好の場所となっている。特に野鳥については、夏・冬鳥、留鳥・渡り鳥など種類が多く、今まで確認されたものだけでも約60種類にのぼっている。また、野草の群生や種類も多く、四季様々な彩りを見せている。(シダ・裸子・被子植物で188種)

この恵まれた自然環境の保存と愛護を目指して、野鳥を中心とした自然とのふれあい・自然へのはたらきかけを実践し、数々の実績を積みながら、都市化されていく変遷に対応しつつ、地域自然財産の存続に努力している。

## 2. 小鳥の村教育活動

### (1) 成り立ち

小鳥の村が開村したのは、昭和31年5月17日である。この開村に当たって、村の運営の可能性や存続性について学校側としては多くの不安を抱いていたが、地区の関心ある住民の熱意と協力にゆり動かされ、単に学校だけの構想や計画だけでなく、地域全体の野鳥愛護を通した自然保護活動として展開していく趣旨を受け、実践する運びとなった。

山林9haの提供地に学習コースをつくり、地区・PTA・専門機関等の協力を受け、小鳥の

村教育活動のねらい・経営・教科と教科外でのとりくみ・観察・記録・保護等の活動のあり方について計画・実践・反省を繰り返しながら、愛鳥教育の基盤づくりを固めていった。

### (2) 願い

本校の「愛鳥愛人」(育ち育てる)の教育目標は、小鳥を愛する人は人を愛することができることにつながり、このねらいに向かって実践を進めることにより、自然と人間との相互関係は望ましいほうへ育ち育てられるという理念に成り立っている。小鳥の愛護を学ぶことによって、生命人格の尊重を強め、自然生物への協調的な共存意識を高めていくことが可能になる。このことから、小鳥の村に託す願いはお互いの生命を尊び、資源を保護し、いたわり合う営みの中で、真の幸福と平和を認識し、保持して正しく強く生き抜く精神と行動を培うことにあるといえる。

自然界の厳しさの中で、たくましく生きる小鳥達の営みの姿を通して、自分達の生き方を見直し、改善し、前進することを活動からつかみ取り、育てていくことが全生命に対する尊厳と共存の精神を築くことになるとともに、郷土の自然に「ふるさと」の心を抱くことにもつながると考える。

### (3) 小鳥の村のめざすもの

- ① 美しさ、やさしさの中にも、きびしさに耐え、それをのり越える小鳥達のように学び合おう。
- ② 小鳥の一番よい住み場所である自然の野山と樹木を大切にしよう。
- ③ 害虫をたくさんとってくれる小鳥達の働く様子を知り、小鳥達が増えるように助け合おう。
- ④ 弱っている小鳥や生き物達をいたわり、死んだ小鳥達の霊を慰めよう。
- ⑤ たくさんの小鳥達が村を訪れ、いろいろ

なさえずりを聞かせてくれることに感謝しよう。

### 3. 小鳥の村教育のあゆみ

札幌市の南に位置する小鳥の村は、豊かな自然に囲まれた鳥獣保護区域として昭和34年に指定され、野鳥の愛護活動と自然保護活動を計画し、愛鳥精神と自然保護精神を培う教育活動を学校教育の全体構造に位置づけて実践してきた。

そして、この地域が人と人、自然と人とのつながりで豊かな条件に恵まれていたことが幸いして、地域に根ざした教育活動づくりを着実に積み重ねてくることができた。ここに至るまで地域産業実情や近代化する住宅開発の発展に対応する問題にも直面したが、小鳥の村名誉村長の小澤広記氏をはじめ、9 haの土地提供者の方々、「小鳥の村と歩む会」の熱意ある協力を得て、教科・教科外での学習活動とのつながりをもちながら、小鳥の村の教育活動を築いていくことができた。

このことから、本校における愛鳥活動の実践は、年々着実にその精神と行動の価値を浸透化させ、学校教育の全領域に根を下ろし、野鳥と自然と子供達の結び付きを強めるとともに、健全なる青少年育成の糧として、地域教育の高揚の存在としてのあゆみを広げてきた。

#### あゆみ ——— 昭和31年～平成3年 ———

- 31. 5. 17 小鳥の村開村式を行う。
- 32. 5. 14 野鳥保護の実績により、北海道知事賞を受賞する。
- 32. 12. 5 小鳥の村教育実践で文部省国立自然教育園長賞を受賞する。
- 33. 5. 14 小鳥の村教育実践で農林大臣賞を受賞する。
- 33. 3. 30 P T A小鳥の村専門委員会を設け、親子ぐるみの愛鳥活動に取り組む。
- 34. 5. 9 愛鳥碑を小鳥の村愛鳥広場にたてる。
- 34. 5. 10 第1回愛鳥祭を行う。
- 34. 12. 20 小鳥の村の歌ができる。教育実践で文部大臣賞を受賞する。
- 37. 1. 21 小鳥の村学習要素表をまとめ、教科・教科外での活動内容の位置づけをする。
- 40. 10. 19 小鳥の村開村10周年記念研究会

で実践報告をする。

- 43. 5. 16 第10回愛鳥祭を行う。
- 43. 9. 24 鳥獣保護実績発表大会で、文部大臣賞を受賞する。
- 48. 11. 2 自然保護活動優秀団体として、北海道知事賞・同教育長賞・北海道放送社賞を受賞する。
- 49. 3. 7 第1回子供の自然と小鳥の鶴会議（阿寒町）に参加する。
- 50. 3. 31 大日本猟友会より野鳥保護校の指定を受ける。
- 50. 5. 16 小鳥の村開村20周年記念式と第17回愛鳥祭を行う。
- 50. 5. 13 コムクドリの標識放鳥（3年計画）を始める。
- 53. 5. 17 平岸スターハイツ小鳥の村と姉妹提携を結ぶ。
- 58. 12. 10 「藤の沢小鳥の村と歩む会」が発足し、地域ぐるみの愛鳥活動をすすめる。
- 59. 6. 3 「小鳥の村首頭」がつくられる。
- 60. 5. 12 第39回愛鳥週間・全国野鳥保護のつどいに参加する。
- 61. 5. 11 小鳥の村開村30周年記念愛鳥祭・小鳥の碑建立除幕式を行う。
- 63. 6. 1 小鳥の村春・秋の校内観察発表会を始める。（野鳥と植物）

今年度5月12日には、第45回愛鳥週間「全国野鳥保護のつどい」で環境庁長官賞を受けた。

### 4. 愛鳥教育活動即自然保護活動

自分達が一生懸命になって作った巣箱にシジュウカラが雛を育てる準備を始める。枯れ草を運び、自分の羽毛を抜き取って、雛達への暖かい巣づくりに励む親鳥達。周りの自然の厳しさに耐え、外敵から身を守りながら、生命の誕生に努める野鳥の姿から、親の子に対する愛情、生きるための厳しさ、忍耐、喜び、思いやりなどを教えられていくだろう。自然は、このように教師となって我々に様々な生き方を、はたらきかけてくれる。

本校の愛鳥教育活動は、単に鳥を観察し、生態をとらえるような理科的な分野の活動目的で発想し、取り組みを進めたのではなく、野鳥達への働きかけや思いやりを積極的に行動化することによ

って、自然のあり方・自然と人との正しい生き方について認識を深め、愛護・保護・共存する態度を培っていこうというのがねらいであって、愛鳥教育活動即自然保護活動なのである。

このことから、自然を軽視する考え・人工的な文明社会を優先する考え・生命の尊厳を軽視する考えに対して、共存と共存の原点に立って、その価値と恩恵を見つめ、受けることが、自然保護への倫理であり、このことは人間が生を受けた原点の時から教えられ、育ち、進めていかなければならないことである。それは、あくまでも、主体的、自主的、自然的に進められるものである。他律的であってはならないのである。

そして、この行動が、自分自身の生き方に反映していくとともに、良き生活環境づくりの糧になっていくのであると考える。

自然がどんな法則をもち、どのような営みを続けているのか、そして、その自然からどんな恩恵を受け、どんな働きを人間として続けていくことが必要なのかを、ただ見つめるだけでなく、自然の中に行動化していくことを、幼いときから、培っていかなければならないと考える。

## 5. 小鳥の村教育活動の実践

### (1) 年間の活動内容

#### ① 行事活動として

愛鳥祭・植樹活動・巣箱かけ・東区年輪の会、豊平区老人大学との交流の集い  
観察発表会・巣箱はずし・餌集め

#### ② 児童会活動として

小鳥の村委員会活動（小鳥の村だよりの発行・給餌と観察記録）

#### ③ 教科との関連活動として

学級の鳥選びとその生態の学習（理科）  
学級旗作り（図工） 愛鳥標語作り（国語）  
春、秋の自然観察（理科・国語） 冬鳥の観察（理科・国語） 愛鳥ポスター作り（図工）  
巣箱作りと給餌台づくり（図工）  
小鳥の村の歌と小鳥の村音頭の学習（音楽・体育）  
教科、道徳における関連学習

### (2) 活動実践例（愛鳥祭について）

#### ◎ 具体的な取り組み

##### [事前活動]

① 学級の鳥・児童会の鳥の決定  
児童会、学級の旗を作る。

## ② 各委員会の活動

委員会名	前日までの活動	当日の活動
書記局 代表委員	案内状 緑の羽募 金 シナリオ 児 童会旗	司会 進行 はじめの挨拶
健 康	花集め（来賓分も） プリントで呼び掛 け	献花の世話 プランタ バ ケツの用意
小鳥の村	愛鳥祭りおりの制 作	記念巣箱かけ 委員長挨拶 はしご 巣箱 用意
環 境	愛鳥標語の取り付 け	後片付け
放 送	放送機器点検	放送機器（運 搬 設置）
図 書	参考図書紹介	後片付け
新 聞	新聞作り ポスタ ー掲示	新聞作り
体 育	会場用具運搬物点 検	募金箱 受付 用机 愛鳥し おりなど運搬

### ③ 標語作りと標語版の作成

3年生以上全員で愛鳥へのよびかけ標語をつくる。標語は、各学級一名の作品を選び標語版に書いて愛鳥広場につづく道の樹木に取り付ける。取り付けは環境委員会担当。

- ④ 来賓、関係機関、父母への案内状の印刷と発想……………庶務係
- ⑤ みこしの飾り付け用具の準備…進行係と5・6年
- ⑥ 愛鳥祭りおりの作成…教務部と小鳥の村委員会
- ⑦ シナリオの作成……………進行係と書記局
- ⑧ 献花用花集めの協力（家庭へプリント配布）……………健康委員会
- ⑨ 愛鳥祭使用物品の購入集約と発注……………会計係
- ⑩ 小鳥の村音頭と小鳥の村の歌の指導……………各学年

### (3) 愛鳥祭が教えるもの

小鳥の村の麓に愛鳥広場がある。そこで毎年、バードウィークに愛鳥祭が行われる。この行事は、今年で33回を迎えたが、今までの活動の経過からみて、この取り組みは、教育的意義からも自然保護に対する認識からも大きな機能を果たしてきたといえる。

それは、この祭を自分達のものとして働きかけ・組み立てていく児童主体の活動のあり方とデモンストレーション的な性格を強調しないで、活動内容の一つ一つに身近な自然に対する理解と保護の心を高揚していくように構成し、行動化しているからである。

愛鳥祭を中心として、愛鳥週間を1週間設け、各学級・各学年児童委員会などで〔小鳥の村の自然保護と恩恵・小鳥の育ちと愛護の仕方・学級や学校の鳥選び・愛鳥標語づくりと標語札かけ・巣箱かけ・愛鳥祭の地域への告知と準備〕を計画的に、発達段階に応じた取り組みをはかり、学校行事としての個々の役割を主体的にしている。また、地域環境を素材とした行事の活動の活性化を図るために、学校・PTA・小鳥の村と歩む会とが連携して、愛鳥祭を起点に年間の保護活動への意義を高めているなど、愛鳥祭のもつ意義は大きなものがある。

このことから、愛鳥祭の継続は

- ① 地域の素材を十分に生かした教育的行事の役割を果たせる。
- ② 野鳥保護への認識を通して、広く自然保護への意識化と態度化を果たせる。
- ③ 地域と学校が連携した保護活動を進めることが、郷土愛の心情を高めることになる。
- ④ 野鳥の霊を慰め、助け合い、守ることの願いが、児童や地域住民の人間的な協調を図ることになる。
- ⑤ 行事への取り組みを起点に、保護・観察活動への主体性を強めることができる。  
などの観点から、今後もより活動への高まりが続いて行くと考えている。

### 6. これからの自然保護活動

自然は、常に営みを続け、成長し、存続を保っている。それは、全ての生存・共存する仲間達へ生を畏敬する道理の表れであると信じる。

この自然と協調していくべき我々が、自然を軽視したり、破壊したり、反抗したりすることは、

我々の自暴自棄につながる。現に、人工的な文化認識の強化から進展を図った結果が、大気汚染・水質汚濁など自然から罰を受けるようなはめになってしまった。人工的・科学的な手段をとることは、人類の特権として、便宜さや向上性からいって必要なことだと考えるが、本来から存在する自然との調和を無視してはならないと確信する。自然と協調する文化の在り方を見直し、進めていくことが現実の課題であると考えます。

自然を見つめることや活用することで、自然とのふれあいを深めたように過信しているが、それは、単に自然を利用していることに過ぎない。自然との共存や協調という本来の道理から照合すると、在るものを与えられるだけでなく、そのものに共立できるようなはたらきかけを進めることが合理的と信じる。

本校の愛鳥教育は、自然の存在を正しく認識し、その自然に適應できる人づくりと行動を示すことによって、連帯と協調の精神を培い、真の共存の意義をとらえようと実践している。

自分も自然の仲間である共存をしっかりと保ち、自然と人とのつながりをいつまでもはたらきかけ、つくりだしていくような保護活動の心と態度を幼いときから育てていくことが不可欠と考える。



# 小鳥さんがプレゼントしてくれた自然との出会い

いしやま中央幼稚園教諭 広瀬 恵子

## 1. はじめに

私達の園では、地域の特性や幼児の情緒の発達という課題をふまえて、小さくもあり、ささやかではありますが、愛鳥活動を続けてきました。

国道 230号線は北海道陸上交通の大幹線で、車輻の走行量も最多という激しさではありますが、この道を外れて、約2km程、市道へ入った丘陵の尾根沿いに、熊笹や白樺など様々な樹々の生い茂った原生樹林がうっそうと連なり、その市道沿いの緩斜面に現園舎があります。ここは、札幌市南郊に位置し、洞爺、支笏湖の入口でもあります。

昭和61年に「前田一步園賞」を受賞し、それを励みとしながら愛鳥活動に取り組んでいます。

園児数 242名の園児達の大半は、「豊かな自然環境に恵まれている」という理由で、入園を希望されています。住宅が建ち並びおもいきり遊べる環境を奪われた子供達にとって、親として求めるのは、豊かな自然環境なのでしょう。

5才児、4才児、3才児と合わせて8クラスありますが、かなりあ、せきれい、あかげら、ひばり、つぐみ、つばめ、ひよどり、むくどり、と、全て鳥の名前から成っています。しかし、実際には、見られない鳥も多いので、「ボク達のクラスの鳥ってどんな顔してるの?」「どうして幼稚園に遊びに来てくれないんだろうね。」と、未だ見ぬ自分の鳥に興味をふくらませています。

## 2. 一年間の自然との関わり

- 4月 ・巣箱の点検と取り付け
- 5月 ・花だん、農園での播きつけ（ヒマワリ、人参、馬鈴薯）
- ・こどもと小鳥の広場オープンの集い  
{春の到来と園庭（自然）の解放を祝うセレモニー}
- ・小鳥の村のおじいちゃんとの出会い
- ・園庭での戸外あそび
- ・林の中へ入り“探検ごっこ”により、自然と触れ合い虫や草花の生態を発見

する喜びを知る。

- 9～10月・木の実拾い、落ち葉拾い
- ・マラソン大会（さえずりの路）
- 11月 ・家庭への飼料提供の呼びかけ（パンくず、古米、脂肉、リンゴなど）
- ・野鳥のスライド鑑賞（餌付けへの興味をたかめる）
- ・野鳥の餌付け
- ・バードキャプテン（毎日のお当番活動として、クラスより代表者1名）による観察表記録と報告。
- 1～2月・餌付けの最盛期
- ・卒園旅行（ウトナイ湖にて白鳥の生態に触れる）

一年を通じて様々な自然と関わる機会があります。入園前は、鳥のさえずりも気付かずにいた子供が、この様な愛鳥活動に参加することで、自然の音さえも自分の耳で発見できるようになります。

愛鳥活動は、小さな所から、身近な所から着実にひとつずつ、時間をかけて継続していくことが必要であり、その中で園児も父母も教職員も“生命のはぐくみ”について、目に見えない大切なものを確かに感得していくのだと思っています。



# 野鳥観察記録

いしやま中央幼稚園

野鳥名	年度	58年度	59年度	60年度	61年度	63年度	合計	備考
	観察日数	39日	65日	45日	80日	29日	258日	
観察期間	1/30 ~ 3/16	11/19 ~ 3/19	12/2 ~ 2/22	10/27 ~ 2/28	2/15 ~ 3/19			
カケス		33	59	41	62	13	208	
シジュウカラ		26	52	27	38	22	165	
ヤマガラ		4	9	16	24	5	58	
アカゲラ		19	24	25	7	8	83	
ヒヨドリ		23	32	20	45	23	143	
オオアカゲラ					1		1	
ハシブトカラ		18	26	19	47	20	130	
エナガ			2	3	15	5	25	— エゾリス — — キツネ — — など —
ツグミ		19	16	1	8	2	46	
キジ					3	7	10	
ゴジュウカラ		2	6		32		40	
クロツグミ					1		1	
ヒガラ			3	1	7		11	
コゲラ					11	6	17	
シメ					2		2	
ヤマゲラ		3	1	8	2	5	19	
オオモズ		6	2				8	
ミヤマホオジロ				14			14	
スズメ				10			10	
カラス						7	7	
キレンジャク								

## 私の愛鳥教育

樽前自然教育研究所主査 三浦 二郎

愛鳥教育と言うと、巣箱教育がイメージされると思いますが、私が現場にいた時は巣箱教育はとうとうやらずじまいでした。やらずと言うよりもやれずじまいでした。

現在、私の家は、樽前山の麓にあり、一面野原の所で、1200戸分の宅地が造成される予定です。まだ、建っているのが4軒で、私の家その4軒目なのですが、ずうっと広々とした原野になっています。

そんな自然環境に恵まれた所ですが、そこで、自分なりに初めて巣箱を架けました。そうしたら、ちゃんとスズメが来てくれて大変喜びました。

スズメが入って、何をそんなに喜んでるんだ？とおっしゃられそうですが、実は、原野ですからスズメが来ないのです。たまたま春になってスズメが顔を見せてくれたわけで、その後、ちょこっとしたネコの額みみたいな庭で餌を食べたりしていたのですが、いつのまにか、いなくなっていました。

そこで、何とか引き留める方法はないかと思い、こりゃ、巣箱が一番手っとり早いだろうと思って巣箱をかけました。

去年かけた巣箱に今年も入ってくれました。大変喜んでます。スズメというのは人間の生活に依拠するものですから、たった4軒では住み着かないのですね。冬の間はそれでもいなくなります。街のほうへ出稼ぎに行くのです。

私のところのクズの木の穴に巣をかけたこともありますが、穴が大きいものでカラスがほじくって引っぱりだしてしまうのです。そんなことでだめだったのですが、今年は何とか巣箱で育ったようでよかったと思っています。

教育活動で巣箱をかけたというのは、ほとんどやっていません。巣箱をかける愛鳥教育のイメージというもの一般にはあるのですが、私の場合はそうではないのだということをお話していきます。

私の年齢は、昭和天皇が御在位でしたら昭和の年号と同じで、6年前に退職しました。生まれは、当時の朝鮮・平壤で、人口は30～40万、屋根

は藁葺きでした。その藁葺にツバメが巣を作ったりしていたのですが、30年経って行って見ましたらガラッと変わっていました。

そんな中で、どういうきっかけだったか私もしかと思ひ出せないのですが、鳥に興味を持ち、今で言うと高校に入るか入らないかくらいの時に、鳥のことなどろくに知らなかったのですが、野鳥の会に入りました。

師範学校に行って、先生を目指し、先生になったら「小鳥の学校」みたいなことをやりたいなとずっと思っていました。一つの夢だったのですね。それで、平壤の街は、鳥と親しみを持ったり、子どもたちに鳥に興味を持たせるにはあまり適さないのではないかと思い、卒業時に任地校の希望を聞かれた際、「田舎にやらしてくれ。」と言ったのです。

そうしたら、今日はちょうど原爆記念日ですが、ピカドンが落ちて、終戦となって、朝鮮にはいられなくなったのです。それで、引き上げてきて、空知の方の炭坑の町に赴任しました。

そこで10年間くらい、「新しい教育の中心は社会である。おまえ、若いから社会科の研究をやれ。」ということで、社会科のことをやりました。夜も職員室で「社会科とは何だろう。」ということで、酒などを飲みながら、口角泡を飛ばして議論ばかりしていました。

そんなことをやって10年ほど経ちましたが、それでも教育の中で鳥をやりたいかたかったです。あのころの理科の教科書には、随分鳥があったのですよ。今はもう本当に刺身のツマぐらいにしか鳥の教材は教科学習にはなくなりましたが、当時は1年から6年までびっしりありました。あれを真面目にやっていたら、もっともっと愛鳥教育は盛んになったと思うのですが……。

これにはいきさつがありました。今は文部省検定教科書で、東京でも北海道でも同じ教科書を使っています。ところが、当時は北海道のローカル版もあったのです。教科書の編集のことで相談があった時、学校の先生が子どもに教える鳥の名前

はこのくらいでいだろうとリストをあげて、教科書の編集者に話をしたところ、「いやーこれじゃ足りない。終戦を迎えて、これからは民主教育・平和教育だ。鳥は、平和のシンボルだからもっと出してくれ。」ということでどんどん入れて、100種ぐらいになったと思います。

ところが、現場でそれを使う側になったら、とてもそんなじゃかなわんということで、40か50ぐらいに減らされたんです。さらに、現場では、鳥の勉強よりも実質的なイモ作りや腹の足しになることに力が入って、鳥のことはおろそかにされたのです。そして、だんだん教科書の鳥の数は減っていき、そのうち、教科書無償制度、文部省検定によってローカル版もなくなってしまったのです。

しかし、これによる不都合がいろいろとあるのです。本州ではありふれたものであっても、北海道では大変教えにくい教材がたくさんあります。私が前にいた根室地方では、特に植物などで生えてくれないものがたくさんありました。イネやヘチマなどは、温室に置かなかつたら理科の勉強にならないのですから。

10年たって、何とかここから脱出しようと思ひ、知人に相談しました。転勤するにしても山の中で10年間社会科ばかりやってきたので見当もつかず、どこか鳥のことを一生懸命やっているところはないかと紹介してもらったのですが、それが、今日発表のありました藤の沢小学校で、まだ小鳥の村ができたばかりの時でした。先ほど、スライドを見せてもらいましたら、立派な鉄筋コンクリートの大きな学校になっていましたが、話にもありましたように、当時は木造平屋建てで裏山にはリンゴ畑があり、そのあちこちに巣箱が掛けてありました。こういう地域性なら巣箱を掛けてもいいなあと思いましたが、実はその巣箱に引っかかりがあります。

「鳥の歌の科学」という名著のある京都大学におつとめの川村先生が、野鳥の会にももちろん入っておられるのですが、「巣箱はやめれ。」と愛鳥教育にもの申したことがあるのです。巣箱は鳥の生態系を乱すものだからやめたほうがいいと、厳しくおっしゃいました。

巣箱のアイデアはヨーロッパですが、ヨーロッパの森林はほとんどが人工林です。そこには、人間が手を貸してやらないと繁殖できない鳥もかな

りいます。例えば、ドイツにドイツトウヒという木がありますが、あいう木はなかなか樹洞ができないのです。それで、巣箱をかけてやれば、樹洞性の鳥が営巣できて繁殖し、森林を守ってくれるようになるわけです。

それが、川村先生が強くおっしゃった京都ですと比叡山がありますが、あそこはシヤカシなどの照葉樹もある、やや天然林ですね。そこに住む鳥は、ずっと大昔からそれなりの生活をしているわけですが、そこに巣箱を架けるとシジュウカラが入ってきてシジュウカラばかりが増えてしまい、餌の取り合いの関係（これを「種間競合」といいますが）に混乱が生じます。ある種類が増えてくると負ける種類がいるわけです。

例えば、海鳥のウミガラスなどは、漁師の意識の低さなどでその数が減ってしまい、今頃になって保護しているのですが、もう手遅れのようにも思います。そのウミガラスの大部隊が利尻島の牧場の真ん中にコロニーをつくったんです。これは、オオセグロカモメが北の方から侵入してきて、ウミガラスに圧力をかけたのが原因ではないかと思ひます。こういうのを、「種間競合」といいます。

川村先生は、種間競合のことをあまりきつくはおっしゃいませんでしたが、とにかくシジュウカラばかり増えてしまったら比叡山の鳥はおかしくなるぞと警告されたのだと思ひます。かなり昔のことになりますが、そういうことは念頭におかなければいけないと思ひています。

シジュウカラのことでちょっとお話しましょう。北海道のシジュウカラが本州にかなり渡っていくということをご存知でしょうか。「日本の野鳥」というフィールドガイドを書いた高野伸二さんが、「北海道の冬はシジュウカラが少ないですね。」とおっしゃったことが私の耳に残っています。

私は、バンディング（野鳥の足などに足環を付けて野鳥の生態調査を行うこと）というのをやっているのですが、私が苫小牧で放したシジュウカラが福島県で見つかっています。函館で放した個体が東京で回収された例もあります。

どうやら、シジュウカラの若者が渡るらしいのです。そして、武者修行をして帰ってきて自分のテリトリーを持ったものが北海道に残るらしいのです。

シジュウカラは留鳥だと言われていますが、こういうデータを集めていきますと、そういう固定

観念を持つことはよくないことだと思います。事実、北海道の鳥はほとんどが渡り鳥です。教科書に書いてあるような夏鳥・冬鳥・旅鳥・漂鳥というのは、北海道ではその通り教えたら大変なことになります。

書物だけで鳥を覚えるのではなくて、子どもたちと実際に鳥を観察してみれば、いろいろなことが見えてくると思います。私は、在職中、ほとんど欠かさず、4時から5時くらいにかけて1時間程必ず歩きました。どこに行けば何がいる。どこの花はいつ頃咲くかななどをきちっと押さえておかないと、子どもに本当の生きた自然を教えることはできません。子どもから気づかせるためにも、教師が先に立って観察し、きちっと押さえておく必要があると思います。

藤の沢小学校の先生のお話の中で、「愛鳥教育ではなくて環境教育だ」というのがありました。自然の素晴らしさや美しさだけでなく、自然の恐ろしさや厳しさについても、環境教育という広い意味での自然教育で扱うべきだと思います。それを抜きにして、いいイメージだけを子どもに教えようとするのは、ちょっと間違っているのではないかと思っています。

例えば、奥尻島には、マムシもクマもいません。そういう心配はありませんが、ツタウルシやキウルシはありますね。（奥尻島での面白い話は、トビがいないことです。また、ブナの木がたくさんあって、実もたくさん落ちるのですが、それを食べるカケスがいないのです。）

ですから、やはり、その学校を中心として、自分のフィールドをまず、教師が把握することが必要です。そして、それを何でもかんでも生徒に教えるのではなく、腹の中にたくさんためこんで置き、子どもから質問が来た時に、それにうまく答えるというのが教師の役目ではないかと思ったりしています。

その後、「根室自然教育研究会」という組織をつくり、先生方と一緒に山歩きをしたり、自分のフィールドを持とうじゃないかと呼び掛けたりしました。厚床小のように自分の学校のすぐそばに学校林があることは、本当に恵まれていると思います。

P・T・Aの会合で、「学校のそばに、学校林でなくとも学校で使える林を持とうじゃないか。」と言ったら、P・T・Aの農家の方たちからえらく

反発を食ったことがあります。と言うのも、酪農の限りなき拡大ということで、その頃根室地方では10町歩も持っていれば大百姓だったのですが、それがパイロットファームで14町歩になりました。本州の人から見ると「すごい。」と思われるかもしれませんが、今は40～50町歩持たないとだめです。そんなわけで、規模拡大のために木を切ってしまうのです。

よく本州から来た学生さんがヒッチハイクで道を歩いています。私は「おい、乗れや。」と言ってよく乗せてあげますが、「素晴らしい。緑いっぱいですばらしい。」と言うのですね。それで、「どこを見てる。これが本当に素晴らしい緑か。緑の質を考えろ。」とハッパをかけたりました。牧草ばかりでしょう。それに、カラマツの防風林が一行に並んでいるだけです。それが、素晴らしい自然とは、もちろん言えないわけです。

その時、学校で使える林を設けるために、P・T・Aの農家に、自分のところにある林をできるように何とか手を貸してくれないかと言ったら、林はぶった切って牧草地にしなきゃ広がらないんだと、えらく反発を食いました。先ほど漁師さんの話をしましたが、農家の人も意識を変えなければいけませんね。

この前、びっくりしたのは、農業開発の役所の人から、「農家の人の意識を変えなければだめだ。」と言いだしたことです。開発の人がそう言うのです。私など、開発は自然保護の敵だと思っていたのですから。今、本庁の方でも、環境庁と農林省と建設省と国土庁と大蔵省も入ってると思うのですが、若手の役員がグループをつくって、自然保護の行政をどう進めたらいいか勉強し始めたようです。これは、いいことですね。

ですから、やはり先生方の盛り上がる力が住民の意識を変えていくのだと思います。島根県の中海千拓も住民の強い反対があったからストップしたのでしょうか。しかし、ストップはしたけれども、あの湖はもとに戻るのでしょいか。

このウトナイ湖にも放水路を引くような予定があるのですが、私は一回やってしまったらもう自然は戻らないと思うのです。そういう無駄な開発をさせないためにも、学校の先生方も住民たちと一緒に力を合わせていく必要があると思うのです。そうしないと、日本の自然が守りきれないのではないかという気がいたします。

全国愛鳥教育研究会副会長 金井 郁夫

今回で4回目になる北海道訪問で、出会った野生動物といえば、エゾシカ、キタキツネ、トガリネズミの死体、ドブネズミ、タンチョウ、ショウドウツバメ、ミヤマカケス、オジロワシあたりは、本州人としては珍しい物となる。それだけの体験から北海道の動物を論じるのは、思い上がりもはなはだしいと考え、北海道も含めた島国日本の動物相を考えることにした。私が資料を駆使して気楽に話ができるのは、東京に棲む鳥や獣そして蛇や蛙の仲間である。今回もできる限りひろく日本の動物相とその由来を考えたいと、東京の動物にもつながりながら筆を進めてみたいと考えている。

話は、レジメの4項目の順で展開してゆくつもりである。

### 1. 日本の動物区界

えらくむずかしい項目のようだが、判りやすく言えば、どこに何がいてるかである。そしてそれ等、動物の棲み分け境界線をどう引くかとなる。

北海道を始めとして日本の大部分は(1)旧北区と呼ばれ、東ユーラシア大陸のほとんどが含まれる。奄美・沖縄地区は(2)東洋区となり、亜熱帯性の気候で中国南部や台湾と同じで色あざやかな花が咲き乱れ、動物相も豊かになり楽しめるが、危険な動物も多くなる。

私は、沖縄本島を一度訪ねただけの観光旅行のため、野生動物にはほとんど出会っていないのである。ガラガラと照り輝く太陽と青い海、そして丘なりに続く照葉樹林から南国を味わっただけの事。

日本の動物区界を知るうえできわめて重要なのが、(3)海峡とその深さである。北から①間宮海峡10m、つぎが②宗谷海峡の60m、そして歌でも全国的に知られた③津軽海峡は海底トンネルで本州と北海道をつなげてしまい、歩行動物の移動を可能にしてしまった。ネズミ等の小型獣や中型獣が自由に往来すとなれば、動物分布から新しい問題が起こる可能性もある。津軽海峡の深さは140mとなっている。

日本の動物区界にいちばん大きな意味のある物

が④トカラ海峡で、その深さは700mである。それ以西(南)が東洋区で華南区系とも言われている。九州と北朝鮮との間にあって日本側になるのが壱岐・対馬で、朝鮮に所属するのが済州島である。対馬の南にあるのが⑤対馬海峡で水深140m、その北で済州島との間が⑥朝鮮海峡で200mの深さである。

こうした6海峡のうち、動物分布上境界線として意味ありとして名を付けられた物が3ヶ所ある。それは、北から宗谷海峡・八田線。これは両性爬虫類の分布から境界となるとされている。

次が、イギリスの動物学者ブラキストンが北海道の動物を調べ、本州との比較から津軽海峡が鳥や獣の分布を区切っているとした事を記念して、ブラキストン線とした。

残る一つは、トカラ海峡で日本の動物地理学者渡瀬庄三郎氏が両性・爬虫・哺乳類の分布から屋久島と奄美大島間に大きな落差があったとした。その結果としてトカラ海峡を渡瀬線と呼ぶようになった。それぞれの線の意味については、日本への動物渡来ルートとして次の章で考えよう。

### 2. 動物たちの渡来ルート

ユーラシア大陸の東南端に位置する日本の動物はすべて元は大陸、そして主力は中国系である。そこから日本へのルートは三つ考えられる。

#### (1) 朝鮮半島系

中国北部の旧満州で知られる黒竜江省から朝鮮を経由して西日本に来たルート、となれば済州島・対馬が朝鮮から日本への陸続きであった頃となる。深さ200mの海が陸であったのは寒期で数回はあったと思われる。いちばん新しいもので今から5万年くらい前であろう。このルートで日本に来たであろう獣は①ツキノワグマ②シカ③タヌキ④イタチと、両生類の⑤カスミサンショウウオと⑥ハコネサンショウウオである。

#### (2) 東支那海ルート

水深が600m程あるこの海が陸であった頃となれば10万年単位の昔になる。ざっと見て30万

年から100万年の古さであろう。この道で日本にやってきた動物は①ニホンザル②アナグマ③カモシカ④ムササビ、そして⑤オオサンショウウオに⑥ヒダサンショウウオあたりになる。

残の一つが、

(3) 台湾、沖縄ルートとなるのだが、東洋区系の東(北)端とも言うべき奄美大島から本土系の屋久島・九州へ渡ったと思われる獣と蛇は全く無い。700mもの深さがあるトカラ海峡の存在が大きかった、と言えよう。そうした意味では、渡瀬線の存在も価値ありとの結論になる。

この深いトカラ海峡を挟んでの共通種にただ1種ヌマガエルがある。このカエルは愛知県以西の西日本から沖縄、そして台湾から中国各地、さらに東南アジア一帯に生活する日本産としては、珍しい分布域の持主である。

トカラ海峡以西(南)の南西諸島の蛇や蛙の豊富さはあまりにも有名。蛇ではハブ、蛙ではイシカワガエルあたりが専門家や好事家の間では話題になるし、料理でも知られるエラブナギも忘れられない。日本に生息する蛇や蛙の過半数は同地方にいる。

(4) 前の3ルートと元は同じユーラシア大陸系でありながら、より北の沿海州からサハリン経由で北海道へ渡来した動物たちもいる。そうした物の代表とも言うべき存在が、①ヒグマそして②テン③シマリス④ナキウサギ⑤モモンガと続く。より小さい獣では⑥トガリネズミ(モグラの仲間)⑦ヤチネズミあたりが北からの渡来獣である。

絶滅獣では、⑧マンモス⑨エゾオオカミはシベリア系でサハリンから渡来しており、どちらも本土へは渡っていない。

釧路湿原に余命をたもっているだけの⑩キタサンショウウオも北方ルートを南下した貴重な両生類である。

(5) 大陸からタタール(間宮)海峡を越えサハリンまで来たものの、宗谷海峡に行く手をはばまれ、八田線でしきられてしまった獣に①トナカイがあり、②ジャコウジカと続く。食肉類では③オオヤマネコや④クズリは結構知られているが、⑤トラや⑥ユキヒョウがいた事実を知っている人はほとんどいない。この2種が現存しているかどうかは不明である。

### 3. 北海道の動物たち

今から50年ほど前に動物学者大島正満氏が、子ども向けに書いた本、動物物語、動物談話を読んでヒグマの恐ろしさ(?)を知ったのである。人を殺し、馬をたおし、牛と相討ちになるなど、子ども心にそのすさまじさは脳裏にやきついており、教職についてからもヒグマの猛獣ぶりを子ども達に話したものであった。

ところが今では、本土のツキノワグマと共にヒグマも絶滅への危機が伝えられるようになり、時代の変化を感じている。どちらのクマも飼育場で見ると、形、動き、表情ともにユーモラスでとぼけた味わいがある。

#### (1) 獣

さきの①ヒグマをはじめとして②クロテン③ナキウサギ④ユキウサギ⑤シマリスあたりは北海道特産で本土ではまったく見られないもので、ブラキストン線が生きてくる。また、本土との共通種には①シカ②キツネ③タヌキ④テン⑤イタチ⑥モモンガ⑦リスがある。

このうちイタチは明治以降本土から荷物にまぎれて渡来したものが増えて住み着いた、とされている。ヒグマからシマリスまでの獣はサハリンから南下したもので本土には達していない。

そしてシカからリスまでのものは本土から渡来した動物で、前のグループは最後の氷河時代であるウルム氷期頃北海道全域に広がったもので、それは今から3万年ほど前のことである。

シカやタヌキ、それにリスたちが北海道へと青森県から北上したのは津軽海峡が陸続きであった時、つまり5万年以前ということになる。

また、本土にはいて北海道にいない獣は、大きい方から①ツキノワグマ②イノシシ③ニホンザル④アナグマ⑤ムササビ⑥モグラである。こうした動物たちが下北・津軽半島にたどり着いた時には眼前に津軽海峡があり、渡島半島は海の彼方にあつた、という次第になる。となればそれは今から2万年ほど昔のことであった、ともなる。

#### (2) 鳥

本土にいる者にとって、北海道の鳥となれば、まず①タンチョウ、そして②シマフクロウ③シロフクロウ④シロハヤブサから⑤オオワシとなり、小さい方では⑥ミュビゲラ⑦エゾセンニュ

ウ⑧シマセンニュウと続く。鳥については知っている人も多いだろうし、私としては深入りするとぼろが出そうなのでここで止めておく。

### (3) 蛇(爬虫類)と蛙(両生類)

基本的には南方系であるこれ等のグループは北海道では少ない。化石としてはカメも産出するが、現在では生息していない。カナヘビ科の①コモチカナヘビはシベリア系で北海道の特産種である。そのほか②カナヘビ③トカゲは本土との共通種。ヘビは④アオダイショウ⑤シマヘビ⑥ジムグリ⑦マムシの4種がいる。どれも本土とは共通種になる。

かえる類の祖先にあたるさんしょうお目(類)は北海道に2種いる。その一つはシベリア系でサハリン経由で南下してきた①キタサンショウウオ。タンチョウ繁殖地として知られる釧路湿原の谷地ぼうずの間にある水たまりに産卵し、そのあたりで生活し細々と生き続けている貴重な動物でまさしく氷河時代のレリック(生き証人)でもある。もう1種のエゾサンショウウオは日本各地に散在するカスミサンショウウオ群の一つで、その祖先は本土から渡来したもので、キタサンショウウオとはまったく系統がちがう。

北海道のかえるは①ヒキガエル②アマガエル③エゾアカガエル④ウシガエルの4種で、エゾアカ以外の3種は本土と共通である、となれば本土からの渡来か持ち込みとなる。種として分化したくらいであるからエゾアカガエルの渡来がいちばん古い物と考えられ、新しいのはウシガエルであろう。このかえるの日本渡来がざっと60年余となれば北海道でのそれは、せいぜい40年ぐらいであろう。北アメリカ原産の帰化種で食用蛙とも呼ばれる事実からも考えられるように、後足は食用とされている。

函館あたりだけしかいないとされる北海道のヒキガエルも前種同様持ち込み種と考えられる。その時代は不明だがウシガエルよりは古いと考えられる。本土の物より小型で後足が長いともいわれている、となれば本土の物より進化しているのかもしれないので一度お目にかかりたいものである。

## 4. 共通種の比較

### (1) 獣

本土に棲む物と北海道のとを比較しておもしろいのは大きい方から種名で、①シカ②キツネ③リスとなる。

まずシカは亜種名でみると北のエゾシカ、そして本州で生活するホンシュウジカ、さらに南西の屋久島に棲むヤクシカとなり、この順に小さくなっている。つまり、エゾシカの高さ(肩まで)は1mほどだが、ホンシュウジカは85cm、そしてヤクシカになると70cmしかない。まさしく、北方大型化の傾向を示し、ベルクマンの法則にピッタリの好例である。

さらに四国・九州に棲む物をキュウシュウジカ(肩高80cm)、ひと頃バツタの大発生で有名になった鹿児島県種子島町の馬毛島のをマゲシカ(肩高75cm)、沖縄県本島西部の慶良間諸島のをケラマジカ(肩高70cm)としている。ケラマジカは江戸時代に九州から移入された物とされており、今では国の天然記念物に指定されている。

また、対馬に棲むツシマジカは、ホンシュウジカと朝鮮にもいるマンシュウジカとの中間的存在として専門家の間では、価値ある種とされている。

子別れのきびしさを人に教えた獣として一躍有名になったのがキタキツネである。ホンドリツネよりひとまわり大きく、より進化した物とされている。本州で私たちが見るキツネは警戒心が強く人の気配がすると逃げる例が多いのに、キタキツネは日中から人の前に姿を見せ、餌をもらっている。野生動物としては墮落である。生活の知恵、ほほえましい現象と見る人もいる。

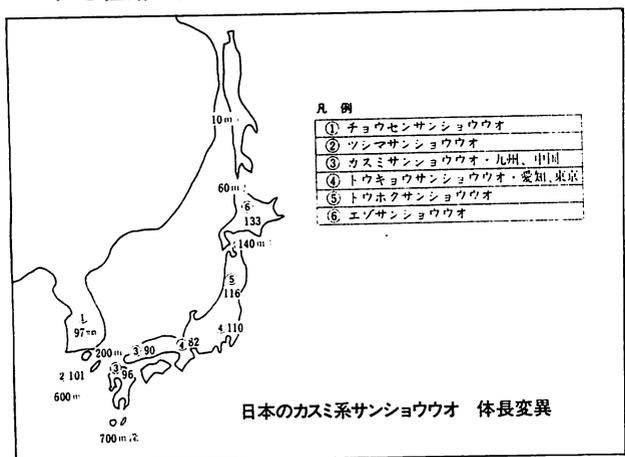
北海道のエゾリスは、大陸に棲むキタリスの仲間と考える人もいるが、ホンドリリスとも近いと思う。ホンドリリスの体長(頭胴)20cmほどだがエゾリスは24cmもあり、あきらかに北方大型化で、前のキツネと共にベルクマンの法則が適用される。

エゾダヌキとホンダヌキの大きさはほとんど同じで、違いはエゾダヌキの体毛は淡色ぐらいである。

### (2) 両生類

獣のシカと同じように本州全域にわたっておもしろい傾向が見られるのはカスミ系のサンショウウオである。日本に16種いるサンショウウオのうち、前出のキタサンショウウオ以外は

すべて西から渡来した物である。カスミグループを経路に従って並べてみるとしよう。



- ①チョウセンサンショウウオ・97mm②ツシマサンショウウオ・100mm③カスミサンショウウオ・九州96mm、中国90mm④トウキョウサンショウウオ・愛知82mm、東京110mm⑤トウホクサンショウウオ・116mm⑥エゾサンショウウオ・133mm。

全体の流れを見ると九州までの南下コースには大きな変化は無いが、本州に入ると小型化し、東京から大きくなり始め、東北地方ではやや大きくなり、北海道ではぐっと大型化で東日本だけではベルクマンの法則に従っているのは偶然の結果なのであろうか。

## 5. 本州での話題

### (1) 獣

新聞やテレビと言ったマスコミ界に登場する機会が多いのはタヌキを主とした

①中型獣の人接近である。人馴れしたタヌキが夜な夜な餌もらいに来る例が美談として報道される例が多い。その原因として考えられるのは、彼らの生活圏へ人が踏込んだのも一つだが、人の心変りを察知した獣たちの安心が大きいと考えている。

つまり、昔はタヌキの姿を見るや目の色変えて追いかけたが、最近はおやっ、タヌキか、そして再会では餌でもやるかとなり、給餌が始まる。タヌキにならったわけでもあるまいに、この頃はアナグマやハクビシンまで餌ねだりに来る例が多くなっている。どうした訳かキツネの接近例はまれで、キタキツネに比

べるとホンドキツネの方が警戒心は強いようである。人からの給餌を受けることに馴れたキタキツネの交通事故死も多くなっているようである。

エゾタヌキの場合は、給餌例は見られない、との話である。北海道ではキツネが人に馴れ、本州ではタヌキが人里をうろつく、この違いは何によるのであろうか。

- ②熱帯・亜熱帯原産で、じゃこうねこ科のハクビシン(白鼻芯)が東京付近では目立ち始めている。樹上生活を得意とするのでムササビ、雑食のためタヌキなどの生活をおびやかすのではないかと、との心配も出始めている。静岡ではミカン、長野はイチゴ、神奈川からはトウモロコシ等の加害例が報告され、害獣化のきざしともみえ始めている。北海道からの生息報(利尻島)もあるが、定着はしていないようである。
- ③山村の過疎化と共に害獣化が目立ってきたのがサルである。初めは観光資源として登場してきたのだが、今では見向きもされなくなり、最近では追われる例も多い。

### (2) 鳥

この項については全国愛鳥教育研究会の皆様は、情報源もあると思われるので、私の近くで目立つテーマだけ記しておく。

- ①ハクセキレイの南下、繁殖
- ②コシアカツバメの内陸進出
- ③ヒメアマツバメの拡散
- ④ユリカモメ川上へ
- ⑤カワウの魚食い

### (3) 爬虫・両生類

- ①子どもたちの手頃なペットとしてブームにもなったミドリガメは、その後要注意の寄生虫がいるとかで下火になった。大きくなると緑色は薄れ茶色がかってしまうので、近くの池や沼に放されることになり、そこで日本在来のイシガメやクサガメの生活をおびやかし始めている。
- ②ヒキガエルの減少。私の住む八王子ではこの25年間ではヒキガエルの産卵場が80%に減り、そこに集まるカエルの数は20%になってしまった。
- ③ダルマガエルの小型化で以前見られた5cm以上の個体がほとんど見られなくなった。

## 夏期研修会「レベルアップ愛鳥教育活動」より

全国愛鳥教育研究会常務理事 杉浦 嘉雄

北海道と東京の会員との間で、今回発表していただいた2校1園の愛鳥教育実践についての研究協議と共に、愛鳥教育全般に関する情報や質問や意見が取り交わされた。和気あいあいとした雰囲気の中で、愛鳥教育の普及や実践に関する有益な意見交換ができたように思う。

以下、その概要を報告したい。

愛鳥モデル校の活動を長続きさせるには？

活動熱心な愛鳥モデル校でも、中心となる先生が異動してしまうと活動が長続きしないことが多い。その場合の予防策として何が考えられるか。

個人の活動に頼ってはいけい。組織としての活動や対応を考えると共に、地域に働きかけていくことも必要である。

- (1) 学校の先生だけではなく、地域の野鳥保護や愛鳥教育に力となるメンバーにも学校教育に参加してもらえるような体制を作る。例えば、
  - ①地域の野鳥の会の探鳥会の参加希望を学校でとり、参加できるような体制をとる。
  - ②学校で開催する野鳥に関する講演や探鳥会（遠足などの行事やゆとりの時間などを活用）を地域のメンバーに依頼する。
  - ③教師集団やPTAのメンバーを対象とした野鳥保護の研修会の講師を地域のメンバーに依頼する。
- (2) PTAなどの折に、父兄同士が地域の環境について話し合う機会を設ける。職業を通して明確な意見を持った人もいることもある。
- (3) 愛鳥モデル校やみどりの少年団などの指定を受け、学校ぐるみで活動する。  
児童会・子供会によるごみ拾い活動を通して、地域の人がいかに海を汚しているかを訴えることで、父兄の意識を変化させることになった実践例もある。
- (4) 愛鳥モデル校同志の交流をはかる。

例としては、

- ①東京都世田谷区では、区内の愛鳥モデル校の連絡協議会を作っている。
- ②他の地域の愛鳥姉妹校と交流する。
- (5) 地域の行政（市町村区の自治体の環境保全課、自然保護課、教育委員会など）のバックアップを得るように努力する。例えば、自治体主催の巣箱展やポスター展などに積極的に参加するのよい。

愛鳥教育だけにこだわらず、自然教育や環境教育に広げていくにはどのようにしたらよいか。

愛鳥活動のお決まりの仕事として、巣箱や餌台の設置、ポスター作りなど、自然についての理解や子供に与える影響を考えないままの実践では、確かに限界が生じる。しかし、子供と自然との関わりを大切にしていって視点を常に持つことによって、同じ愛鳥活動でも環境教育の効果を得ることができる。例えば、探鳥会、テグス拾い、テグス調査のまとめ、釣人への協力依頼などが考えられる。

全国愛鳥教育研究会は10年の歴史を持つにも関わらず、まだ会員数も少数で、その取り組み内容も変わっていないように思うが、今後どのように展開していく計画なのか。

学校教育課程への位置付け、実践方法の開発・検討・例示などを考慮した、愛鳥教育活動のマニュアル作成を現在進めている。

今回のような研修会活動をさらに充実させたい。また、会報誌「愛鳥教育」の内容充実を多方面から進めていきたいと考えている。

さらに、教育関係者だけでなく、広く会員を募り、学校内だけにとどまらない幅広い愛鳥教育活動の推進と展開を考えていきたい。

# “野幌森林公園”と“ウトナイ湖”

全国愛鳥教育研究会常務理事 杉浦 嘉雄

## 「野幌森林公園」

スケールの大きい森林が、大都市札幌の中心街から、わずか10km余りさきに横たわっている。日本では、珍しい大都市近郊の平地林の公園で、札幌市・江別市・広島町にまたがる野幌丘陵に広がっている。面積は2,051haで、そこには500種類を超える植物が生育している。

「野幌森林公園を守る会」制作のビデオやガイドマップ、「野幌森林公園事務所」発行のパンフレットなどに詳しい情報が載っている。

### ●「野幌森林公園」の野鳥たち

この公園では、カラ類やクマガラも含めたキツツキ類、エゾライチョウ、フクロウ、ミヤマカケスなどの森林の野鳥が主体であるが、オオジシギ、ヒバリなどの草原の野鳥、オシドリ、アオサギなどの水辺の野鳥も生息している。今までに、約140種の野鳥が確認されている。

### ●交通案内



### ●「野幌森林公園」位置図



(・交通案内図・野幌森林公園位置図は、同公園事務所「野幌森林公園」パンフレットより転載)

●問い合わせ先 北海道野幌森林公園事務所  
 〒004 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 開拓記念館内  
 TEL 011-898-0455 FAX 011-898-2657

# 「ウトナイ湖サンクチュアリ」

北海道の勇払原野にあるウトナイ湖は、面積 221ha、最深点65cm、平均水深37.8cmと非常に浅い沼である。日本野鳥の会が、苫小牧市の協力を得て昭和56年5月に、周辺の原野、森林を含めた約511haをサンクチュアリにした。

「日本野鳥の会」発行のガイドマップやパンフレットなどに詳しい情報が載っている。

## ●「ウトナイ湖サンクチュアリ」の野鳥たち

日本でも屈指の渡り鳥の中継地であるウトナイ湖サンクチュアリ地域には、今までに約250種の野鳥が確認されている。オオハクチョウ、マガン、ヒシクイ、マガモなどの水辺の野鳥が130種、シマアオジ、マキノセンニュウなどの草原の野鳥、ノゴマ、ヤマゲラ、ハイタカなどの森林の野鳥合わせて120種が確認されている。

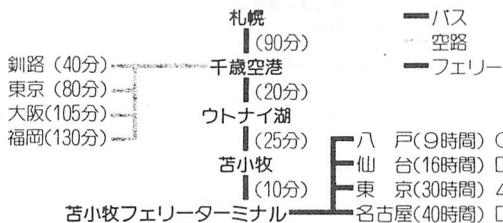
## ●利用案内

- 開館時間：午前9時～午後5時
- 閉館日：毎週火・水曜日(但し、祝日を除く)
  - 年末年始は12月26日～1月1日まで閉館します。
  - ネイチャー・センター閉館の際は、他のサンクチュアリ地域内への立ち入りもご遠慮下さい。
- 入場料：無料ですが、ネイチャー・センター内に募金箱がありますので、自然を守るためにご協力をお願いします。

## ●近辺の宿泊施設

- ウトナイレイクホテル(日本野鳥の会協定旅館。会員1割引) ☎0144-58-2111
- 苫小牧市営ウトナイ湖コースホテル ☎0144-58-2153

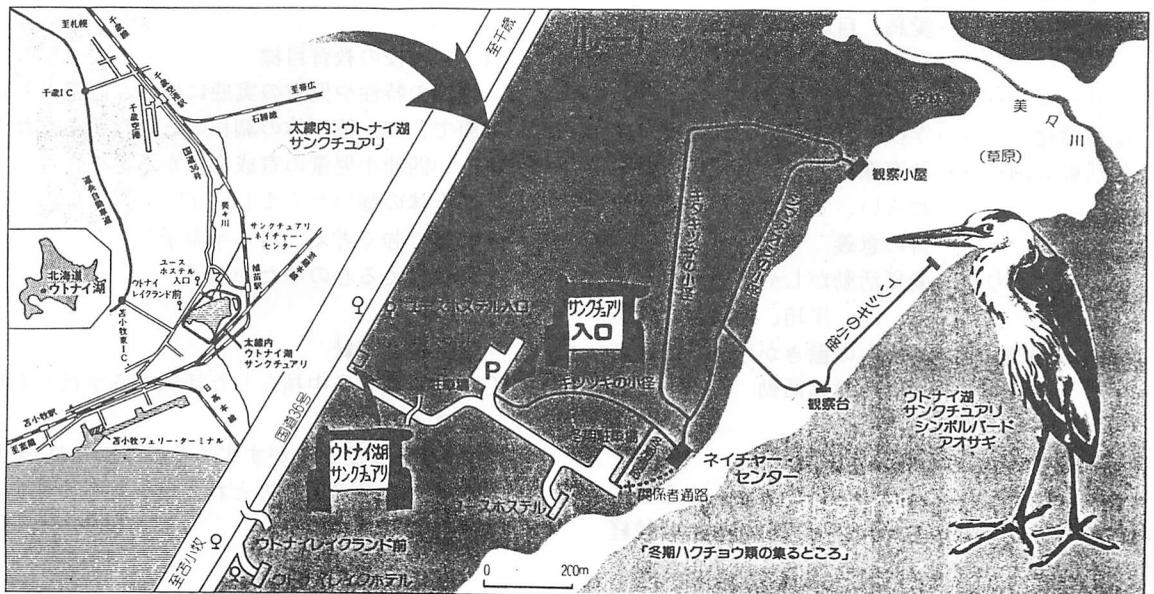
## ●交通案内



## 問い合わせ先(☎)

- 航路 { 日本沿海フェリー△ 03-574-9561  
太平洋フェリー □052-221-6615 (苫小牧)34-5185  
東日本フェリー ○0144-34-5261
- 空路：各航空会社営業所  
中央バス苫小牧営業所 0144-33-9028  
道南バス " 0144-34-2032
- バス { 苫小牧市営バス営業所 0144-55-4141

## ●サンクチュアリ位置図、ルートマップ



(・交通案内図・サンクチュアリ位置図およびルート・マップの図は、いずれも(財)日本野鳥の会「ウトナイ湖サンクチュアリ」パンフレットより転載)

●問い合わせ先 (財)日本野鳥の会  
〒150 東京都渋谷区渋谷1-1-4 青山フラワービル5階  
TEL03-3406-7141

●ウトナイ湖サンクチュアリ「ネイチャー・センター」  
〒059-13 北海道苫小牧市植苗150-3 TEL0144-58-2505  
火・水曜日を除く9.00～17.00

# 愛鳥教育実践講座Ⅲ

## 子どもたちの愛鳥活動を支えるもの

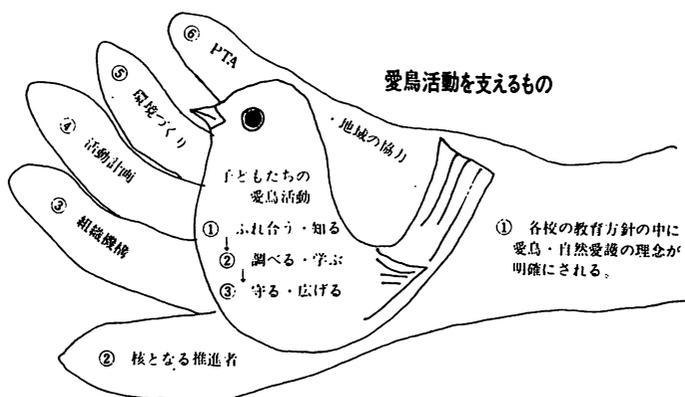
全国愛鳥教育研究会常務理事 渥美 守久

愛鳥教育を進める上で学校現場における困難な問題は何か。愛鳥活動、20余年の私なりの実践と反省をもとに、「子どもたちの愛鳥活動を支えるもの」という観点で考察してみようと思います。

「愛鳥教育」を手のひらにのった小鳥の絵図で表してみました。

なんらかの形で投影させることが何より重要だと思います。

次の表は、私の学校（愛知県蒲郡市立西浦小学校）の平成3年度のもので、まだまだ充分とはいえませんが、各校ではどのように位置づけているでしょうか。この教育方針こそ共通理解のもとに愛鳥教育を進めていくための基盤であると思います。



先ず、愛鳥活動を支える要素を次の6つの内容にしぼり、今回はそのうち①②③④について考えてみることにします。

- ①教育方針……愛鳥、自然愛護の子ども像が見えるもの
- ②リーダー……核となる推進者
- ③組織化……学校運営機構の中に位置づけ
- ④活動計画……教育課程のどこで愛鳥活動をねらい、すすめるか。愛鳥教育の意義
- ⑤環境づくり……愛鳥活動がしやすい場づくり、森、池、巣箱、給餌台、ほか
- ⑥PTA・家庭……地域への働きかけ、PTAとしての愛鳥活動

### 自然を愛する子ども像

私は、ここで愛鳥教育の根幹をなすものとして①の教育方針をとりあげたいと思います。学校経営（管理案）の中に「自然を愛する子ども像」を

### 教育目標

- (1) 本校の教育目標  
地域の特性や児童の実態に即し、心身ともに健康で、知・徳・体の調和のとれた明るくたくましい西浦小児童の育成をはかる。
  - ・心と体の強いたくましい子
  - ・ねばり強く考え、自ら学ぶ子
  - ・助け合える心のゆたかな子
- (2) 経営方針  
○ 健康教育を中核とした活気ある学校づくりをする。
  - 「ひとりひとりがすすめる健康づくり」を基盤に、心身の調和のとれた子どもをめざす。
  - ・体育的諸活動
  - ・自然に親しむ活動

- ・青少年赤十字活動
- 自ら求めて学ぶ学習活動を推進する。  
「わかる授業」の創造に努力し、自ら学ぶ力を育てる。
- ・心のふれ合いと信頼で結ばれた学級・学校づくり
- ・ものごとを見る眼、感じる心、追求する手法を重視
- ・基盤基本を確かめ、実践活動を重視
- 現職教育を充実し、専門職としての研修に努めるとともに、地域に根ざした学習の一層の発展に努力する。
- ・身近な地域教材の開発  
-「西浦半島に学ぶ」-
- ・学び合い、みがき合う職場づくり
- 教育環境を整備充実し、学習の効率を高める。
- 家庭や地域社会との連帯感を高め、相互理解に心がける。

### (3) 本年度の重点努力目標

- 職員相互の信頼と共通理解の中で、現職教育の充実をはかり、教育諸活動をすすめる。
- 子どもと教師、地域と学校とが一体となって健康教育の、一層充実発展に努力する。
- 自然とのふれ合いや青少年赤十字活動を取り入れた、幅広い「きじっ子活動」に取り組む。
- 「子どもをやる気にさせる学習」を追求し主体的に問題解決に取り組む子どもの育成をはかる。
- 助け合い、きそい合い、みがき合える学級づくりに努める。
- 自分の考えを十分出しきる表現活動を重視し、その向上をはかる。
- 健康・観察コースの整備充実をはかる。
- 「ゆとりの時間」を活用して勤労体験学習を積極的に推進する。
  - ・栽培計画の充実
  - ・愛校奉仕活動
  - ・環境づくり活動
  - ・手づくり活動
- 道徳的実践力、望ましい生活習慣の育成に努める。
  - ・学校行事

- ・特別活動
- ・ゆとりの時間の活用

### イ 自然愛護運動

- きじっ子の森をみんなの森として、大切に育て守る活動をすすめる。
- 学校裁量時間の「きじっ子活動」を母体として、西浦小鳥獣保護区のアシタビ活動を展開する。
- 校歌にうたわれている宮地の松とトビの巣の保護および、周辺の自然に目を向けさせる運動を展開し、愛知県鳥獣実績発表大会に参加する。

### ウ 花づくり運動

- 情操教育の一環として、子どもたちの手で育てる花づくりを通して自然に親しませる。

### オ 学校裁量「ゆとりと充実」に関する指導計画

- 方針  
西浦半島に生息する野鳥のシンボル、日本の国鳥ともなっている「きじ」にあやかり、「きじっ子活動」と銘うって、つよく・たくましく・美しく、わがまち“西浦”を愛する豊かな個性を育てる。

### エ 公害に関する指導

- 本校での指導重点  
本校では、愛鳥活動を中心に自然愛護の活動が長年続けられているが、近年、松くい虫などによる松枯れなど、自然環境の衰退が見られる。また、海のごみや大気のごみなどともからめながら、自然環境の保全に対する問題を中心に公害問題全体に目の向けられる子の育成をはかる。

### リーダーを育てよう

次に、②のリーダーとなる先生を一人でもふやしていくことは、愛鳥教育の推進に欠かすことのできない要因です。しかしながら、現状では、ただでさえ数少ない指導者が数年おきには勤務先を変えざるを得ません。そのため、推進半ばにして

かなりの打撃をこうむることはしばしばです。せっかく、子どもたちが自然に目覚め変容しつつあったり、組織的にも動き始めた時など、愛鳥活動がやっと軌道にのり始めた時の無念さといったらないでしょう。必ずしも愛鳥指導の連携がうまくいくとは限らないだけに、このことは毎年、各地で起きている困りごとの一つと言えます。

それで、リーダーを失った学校は継続の危機に直面する。「誰が野鳥部の子どものめんどうをみるのか？」「探鳥会は？」……そこで理科の先生にお鉢がまわってきます。しかし、「わしゃあ、物理だの、地学だの」と大学での専攻を口実に逃げ腰となることが多く、もし校内人事でもつれたりでもしたら継続発展どころか一環の終わりです。

一方、新しい任地に着いた指導者の場合も、勝手知らずで、ようすながめの受け身のスタートとなりがちです。そんな中から学校経営の方針や組織に愛鳥活動を押し出していくのは容易なことではありません。それで、また自分の学級からの出発にならざるをえないのです。

### 勝負どころ

毎年、春休みの1週間が愛鳥教育の勝負どころです。転動のない運営委員会のメンバーで、新学期の学校経営の草案がねられる場合がふつうですが、この時期に愛鳥教育の方向づけが生かされないと機を失ってしまうこととなります。新学期に入れば、学校は早々に動きだしてしまうので、中途半端な考えや構想は検討する時間のないままのスタートとなってしまう、また自分の学級だけの活動にならざるをえないのです。

この障壁を突き破る力こそがリーダーの情熱と言えましょう。今現在も、機関誌や現場での実践を通して、熱意あふれる仲間を一人でも増していく努力がなされてなくてはならないと思います。

愛鳥モデル校ではすでにその愛鳥環境も整っていると思いますが、全国の大部分の学校は愛鳥教育の必要を感じつつも、リーダー不足の問題を抱えているのです。

### 気軽にやろう愛鳥教育

愛鳥教育は鳥の名前が知らないからと敬遠している方が多いのではないのでしょうか？

リーダー不在でも、鳥や草木に少しでも興味関心があれば十分にやっているといます。四季

を通してみると、鳥との出会い、愛鳥のチャンスはいくらでもあるものです。

まず、スズメやツバメから始めた方がいいのです。子どもが心配そうに持ってきた傷ついた鳥、死んでいた鳥でも、子どものその小さな優しさを先生が受け止めさえすれば、愛鳥活動の出発点となるのです。そうした日常的な子どもたちのこだわりや話題をみんなの問題に広げてやることさえすれば、それだけで立派な指導です。

愛鳥教育の原点は、先生方一人一人の学級経営の姿勢と愛鳥観にかかっていると言えるでしょう。そうした学級での小さな愛鳥活動の実態が、他の学級の関心となり校内に広がっていくのです。

そのために、作文、絵、壁新聞、昼の放送などの方法や機会を活かすようにしたらどうでしょうか。さらに、先生の関心や話題にまで高めていくことができれば、学校経営に反映されていくわけなのです。

たしかに根気はいりますが、自分のまいた愛鳥の種が成長してくれるのは楽しみなものです。まあ、難しく考えないで気楽にしかも創造的に対処していけばよいわけです。とはいってもほとんど横の連絡のない状態です。お互いの研究交流がなければ不安でありましょう。その点でも本会の機関誌「愛鳥教育」の果たす役割の大きさを強く感じるものです。

### 望まれる地域での研究会

実はここまで論じておきながら、変な言い方になりますが、愛鳥教育をしてもしなくても日は暮れていくわけです。

では、それなのに何故するのか？「変わった趣味だのん」ぐらいで終わらせないために、教育のすばらしい中身として、生き生きとした子どもたちの愛鳥活動の姿はこれだ！というものを提示していくことが、今日まで、われわれ会員が必死で取り組んできた各校の実践ではなかったでしょうか。「そんなすばらしい教育実践なら、うちもぜひやってみよう」と、若い先生からまた校長さんからも注目されるようになったらいいと思います。

ここで、愛鳥研究の基盤の弱さを心配する一人として、ちょっと考えたいのは、これまでの愛鳥教育の支えとなったきた行政的な基盤としての林野庁や環境庁との関係です。たしかに愛鳥思想の啓蒙と愛鳥教育行事の普及と発展に寄与していた

だいてはいるのですが、現状のままでよいものでしょうか。教育技術向上や教育研究の形態に関する研究への参加等がうまくいっていないだけに、この課題が愛鳥教育研究会の発展する課程のなかで早期に解決されることが待たれます。

情操豊かな子どもの育成を目指しているわけですから、文部行政の支援をもちいただきながら、全国各地で研究会がもたれ、自然愛護の担い手となる若い指導者の多数の出現を待ち望むものです。

## 活動計画

教育課程のどこで愛鳥活動をすすめるか。このことについては、④で活動計画の例(表)を掲載しましたので、参考にしていただきたいと思えます。特色としては、みんなで組織的に活動しているということ。児童会・PTA・きじっ子タイムなどを支えるのは、常時活動の自然観察部が情報提供の中心となって展開していくことです。

さて、今までの活動計画といえば、教科外の特別活動での学級活動か部活動が中心でした。また、愛鳥モデル校の先進校では、ゆとり(学校裁量)の時間を自然愛護に生かすなどが主たる愛鳥教育の指導の場となっています。教科扱いとしては、せいぜい図工の愛鳥ポスター、カービング、巣箱、給餌台、道徳での自然愛護くらいです。国語で愛鳥教育につながった優れた教材として、物語文では、椋鳩十の「大造じいさんとがん」。説明文では、鳥の渡りをときあかしたドイツのクラマー(ほしむくどり)ザウアー(のどしろむし)などのことを思い出します。ところが、理科と深い関係をもつ野鳥が、なぜかその学習内容としてはほとんど影の薄い存在で扱にくい状態でした。しかし、小学校学習指導要領の改訂に伴い、平成4年度使用の教科書では、生活科、理科では生き物と親しみ接する内容がふえてきましたので、期待したいところです。

6年生の理科では、「人間の生活と自然環境」の新しい単元で、身近な自然環境について食物連鎖を通して学ぶようになっていますが、校内にまた周辺に愛鳥の森などの環境にめぐまれているならば、工夫次第で教材として生かし易くなっています。私も、今こそ森での環境学習には野鳥を生態系の核として、身近なさまざまな自然理解につながる楽しい学習が展開できるものと確信しています。早速、自主カリキュラムの検討に入ったと

ころです。

このように、理科の中に自然環境を考える単元がはっきり明示されたことで、単なる趣味の分野くらいに見られがちだった愛鳥活動も、教科学習として展開しやすい条件がそろいつつあるといえましょう。

教科書改訂の機会にそれぞれの地域での愛鳥教育につながる、教材内容にも是非とも目を向けていきたいと思います。

## 愛鳥教育は環境教育

愛鳥教育の流れもずいぶん変わってきています。シジュウカラと巣箱から出発した活動も、広く環境教育の内容となりつつあります。

今、地球環境の危機が叫ばれています。温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊、熱帯雨林の伐採、砂漠化などの大きな問題が、TVを通じて茶の間に報道され、警鐘を鳴らしています。まさに世界は遠くて近い存在であります。その現状をはっきりと目に焼き付けておきながら、自分が踏みつけているその足下の環境にも、それ以上の関心を持つべきだと思います。

近くにあって遠い存在となってしまった周辺の自然に接することのますます少なくなってしまった子どもたちに、身近な草花、虫や野鳥のことに親しむ体験をじゅうぶんさせることが地球理解につながると思います。

自然に「①ふれあい、知る。②調べ、学ぶ。③守り、ひろげる。」五感を働かせて感じとって体験こそが真実をみきわめる力を育て、ひいては地球のことを考えていくことのできる子どもたちが育つのだと信じるものです。自然と出会い自然にふれあった時の子どもの感動といたら、それはすばらしいものです。その状況を引き出すのが愛鳥教育の目標の一つだと思います。

金井先生の「むらの理科ことはじめ」を毎回楽しみにしています。身近な感動が理科の学習の導入となって、ほのぼのとした会話の中に、自然に学び追求する学習の姿が目映ってきます。

愛鳥教育は鳥だけに終わらないし終われないのです。環境教育の中にあって自然理解にせまる最良の手段として、学校や家庭で発展、定着するようがんばりましょう。

## 愛鳥・自然愛護

月	自然観察部の活動	児童会・自然愛護委員会	きじっ子タイム
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然ごよみ記録と掲示始める</li> <li>・トビの巣調査等野鳥観察始める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・愛鳥緑化ポスター、詩、作文標語の校内募集</li> <li>・愛鳥のつどい立案検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・春の七草、野菜や花</li> <li>・トビの巣の観察する</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・愛鳥のつどい立案 [愛鳥週間行事、愛鳥自然愛護のつどい、5/11(土)きじっ子タイム]</li> <li>・きじっ子の森営巣調査とトビの巣コースの整備、PTA探鳥会下見</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・草木の名札しらべ、取り付け</li> <li>・春の野草展示コーナー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・春の草花の名前あてキー</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形北小との合同探鳥会</li> <li>・海岸のバードウォッチング</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然クイズ(野草、野鳥)立案</li> <li>・ビワの実採りと配分</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然クイズ</li> <li>・グリーンウォッチング</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トビの巣コース営巣調査</li> <li>・校内発表の諸準備、練習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・天然記念物の指定検討</li> <li>・夏休み中における飼育する生物に関する指導</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・昆虫クロッキー</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ [第21回県鳥獣保護実績発表大会に参加、代表 11名 ]</li> </ul>		
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ [夏休み作品、西浦大発見パート4 自然をテーマにした作品展]</li> <li>・秋の渡り鳥 稲村山のサンバ他</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋の野草ウォッチング</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋の渡り鳥山崎地区のノビタキ他</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きじっ子の森秋の実を採集する糞に出てくるものとの比較に活用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋の森探検</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実を食べる野鳥</li> <li>・巣箱点検と設置及び給餌台</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然クイズ(秋の野草他)</li> <li>・給餌台と野鳥の招き方プリント</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋の野草名前調べ</li> <li>・紅葉する木を見つけ</li> </ul>
12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PTA探鳥会の下見、調査</li> <li>・豊橋自然動物園見学(冬休み)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・愛鳥作文、詩募集呼びかけ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピラカンサ、コナラ</li> <li>・鳥ウォッチング</li> <li>・ビワの花の蜜を吸い</li> </ul>
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ [公民館祭り 自然愛護コーナー参加、町の人に愛鳥を呼びかける]</li> </ul>		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・給餌台点検修理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・センダンの実を食べ</li> <li>・リ、ムクドリ、ツグミ</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形北小との合同探鳥会</li> <li>・形北小学区(カモの観察)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きじっ子の森の傷んだ所の点検</li> <li>・お別れ遠足(ファミリー)立案</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きじっ子の森の春を</li> <li>・自然クイズ(実と野</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・PTA探鳥会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年の反省</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きじっ子の森の四季</li> </ul>
備考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・愛鳥活動の中核として、毎日活動する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きじっ子の森や自然を守る中心となって全校にひろげる活動をする</li> <li>委員会・児童議会</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・25分放課を季節ごむ時間</li> <li>毎月、一週間は自然として活用する</li> </ul>

# 活動計画(案)

蒲郡市立西浦小学校

活動	学級活動・ゆとりの時間	学校行事、現教	P T A 活動
クロッキー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・きじっ子の森及びトビの巣コースの探検をしよう(春を見つけよう)</li> <li>・学級園の手入れ、植つけ等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・春の遠足</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・P T A 総会における愛鳥自然探鳥会計画</li> </ul>
ムと第3時限全校参加] び、クロッ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トビの巣の観察</li> <li>・学校でのグリーンウォッチング</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(現教)きじっ子の森トビの巣コースの自然</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・P T A の参加可</li> <li>・親子探鳥会(トビの巣コース)</li> </ul>
(木の名前)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・潮干狩りと磯の生物</li> <li>・森や池での昆虫ウォッチング</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・5年キャンプ場の自然</li> <li>・きじっ子の森手入れする草刈り</li> </ul>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西浦大発見自然研究のテーマを考える</li> <li>・夏休み前の農園の世話</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏休み自由研究指導</li> </ul>	
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の中でどう自然を生かすか(生活理科)の研究</li> </ul>
クロッキー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋の野菜しらべ農園の野菜づくり</li> </ul>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遠足と自然(秋の草花、野鳥)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・秋の遠足</li> </ul>	
う	<ul style="list-style-type: none"> <li>&lt;身近に冬鳥たちを招こう&gt;</li> <li>・各学級の給餌台づくりと世話の仕方を話し合おう</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(現教)</li> <li>・きじっ子の森の秋</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭に冬鳥を招こう給餌の仕方パンフの配布</li> </ul>
に集まる野			<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子探鳥会(カモ池)</li> </ul>
来るメジロ			
来るヒヨド	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公民館祭りへの愛鳥版画出展</li> </ul>		
つけよう	<ul style="list-style-type: none"> <li>・トビの巣コース、きじっ子の森まで春を見つけよう</li> <li>・お別れファミリー遠足</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西浦半島一周お別れ遠足</li> </ul>	
ライド	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お別れ自然探検他</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・親子探鳥会(渚コース)</li> </ul>
自然に親し	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各学級ごとの計画で自然にふれ、自然を守る活動を実践する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特にきじっ子の森の自然を学習に結びつける研究を推進する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・西浦の自然を家庭の立場で大切にする活動をする</li> </ul>
関する時間			

## 論説

# 学校教育で何ができるか。何をやるのか。

全国愛鳥教育研究会常務理事 平田 寛重

愛鳥教育……野鳥観察を通して自然保護思想の普及を図る。このことについて、学校教育では、どんな取り組みができるのでしょうか。

現行の学校教育は40人学級で編成されています。クラスを単位にすると、その40人を一斉に教えるという図式がまず想定されます。しかし、このままでは画一的にならざるを得ません。また、評価などということを考えると、だいたい、歪んだ方向に行きかねない状況にもなります。自然観察の分野から自然保護を考えていくには、野外における実物に即した学習がその前提となります。また、自然の中で感じた素晴らしさなどは、個人によってかなり差がありますし、表に出にくい場合もあります。指導者側があまり、その辺のところを追求するのも、かえって興ざめになってしまい、よい結果には結び付きません。その点、家族や少人数のクラブ活動などでは効果的な取り組みが可能です。従って、内容やレベルによって、家庭・社会・学校がそれぞれの領分できちんと働きかけていくことが大切です。では、学校教育では、どんなことにポイントをおいて取り組むことが効果的なのでしょうか。

映像や写真・読み物などを使えば、一度に40名の児童に情報を知らせることができます。これは、何も特別な時間を設けなくても実践が可能です。例えば、国語の学習では、「大造じいさんとがん」などの授業の最後に、ビデオや写真を見せたり、実際に近くに見られるところがあればそこに行って観察する。また、県内に見られるところがあればそこを紹介したり、昔、見られた話などをするといったことで、児童にガンやハヤブサを身近なものとして意識させることができます。こうして身のまわりで見られる野鳥に関心を持つ下地をつくっていくことができます。これは、何も国語だけに限らず、理科や音楽・図工など、その他の教科でも十分実践可能です。

このような投げかけをふだんの授業の中で行っていくことが、無理なく愛鳥教育を学校で進めていくために必要です。このような、下地をつくり

だし、次の段階として、個人が鳥に取り組めるプログラムを展開して行けばよいのです。

なお、授業の中で効果的に野鳥の啓蒙活動を取り入れて行くためには、野鳥に関心のない教師も仲間に引き入れるような雰囲気を持ったオリジナルなビデオや資料を開発していくことも必要です。そのためには、その地域の自然や野鳥や野鳥との接し方についての正しい認識を持ち合わせる必要があります。これらについては、各自文献を調べたり、詳しい人にたずねたりして学習していったほうがいいものです。

学級活動やゆとりの時間を生かして、ぬりえカレンダーを作成したり、ツバメの観察やツバメの巣のマップづくりなどの普及活動を経て、実践的な活動へと展開していくことも可能です。

そのほか、授業としての取り組みでは、例えば生活科では、身近な自然とのかかわりの学習の一環として「ツバメ」の観察を教材化することで、野鳥の継続的な学習が可能になってきますし、親をも巻き込み、自然とのかかわりも充実したものにしていくことも可能です。また、学校の一角に野鳥誘致施設を造り、食環境を充実させ、ブラインドを設置し、のぞき穴から鳥を間近に観察しながら、野鳥に親しませることで、野鳥への感動を盛り上げる機会を提供することができます。

また、新4年の理科の季節の移り変わりの学習では、前述の「ツバメ」はもちろんのこと夏鳥や冬鳥を教材化することにより、生活科との系統的な側面も充実してきます。また、渡り鳥の学習によって繁殖地や越冬地の自然破壊の問題などに目を向けさせれば、環境教育としての側面も充実させていくことが可能です。

それから、近くに野鳥の見やすい環境があれば、冬などは、2～3台の望遠鏡を使って、間近に観察することができます。

こういう活動は、低学年で行うほど、野鳥への思い入れが増し、その後の自然認識面での充実に、寄与します。

# むらの理科ことはじめ(11)

## 台風ものしり帳

全国愛鳥教育研究会副会長 金井 郁夫

二学期も始まって10日目のある日「先生っ。ぼつぼつ台風が来てもよさそうなのに、ちっともこねえなあ。」と切出したのは照久である。「そうだなあ。この頃は台風も不真面目になってきたようで、めったに上陸しなくなったなあ。」と答える。こうなるとしばらくは授業本題には入らぬと知ってか、生徒たちの顔もにこやかになってくる。

「そういえばこの前台風が来たのはいつだったかな。あんときはすごかったでね。なにしろ隣んちの鶏小屋のトタン屋根がパタパタし始めたのでつい見とれちゃったもんなあ。」と話し始めたのは耕吉である。その話の腰を折らんばかりに次郎が「そんでその屋根どうなった。」とたずねる。耕吉はにやりとしながら「うん。トタンをとめた釘が抜けたらしく、風にあおられ、だんだん剥がれて大きくめくれるんだよなあ。それを見ながら思わず、<もう少しだ、がんばれえ。>って風に応援しちゃうんだよなあ。」には皆お笑い。笑いがおさまるのを待って、清が「火事場見物と同じだなあ。」とやると皆も一斉にうなづく。

「それで屋根はどうなった。」とたずねたのは修治である。「期待どおりうまくすっ飛んじゃったよ。」で台風話の前座はちょん。

「さてそこで恩曾(耕吉)にたずねるが、その鶏小屋はどっち向きだった。」「えーと、おれんちの東窓から見て左向きちゃうと、南か。」

「そうすると南風にあおられた、とすれば台風は八王子より西を通っている。となれば伊豆半島の北端に上陸し、富士山の東を山梨から埼玉へ抜けたおとしの台風16号だな。」と解説する。「なぜそんなことがわかんのかよ。」と嘯みつかんばかりに質問したのは、うるさ型の公彦である。

それに対しては、わざとゆっくり「それはな坂本(公彦)。台風というのは低気圧の一種なんだよな。」「だから台風の若いのを熱帯性低気圧っていうのか。」「そのとおり。おめえさんけっこう物知りじゃんか。」には、さすがの公彦も思わずにやり。「低気圧というのは……」で、話を止めて教室内を見まわし、「おい長田。続きは何

だ。」には反射的に立ち上がり、「えーと、低気圧とは真ん中の気圧がまわりより低い。」「うまいっ、ご明答だ。だから風はどうなる。」「ええっ、まだ答えんのかよお。低気圧ちゃうのは天気が悪いぐれえまでは知ってんけど、風なんか知らねえなあ。」「さすがの長田も知らなかったか。それじゃ、少しうるさ型の吉田はどうよ。何か言ってみねえか。」には、しばらく座ったまんま考えていた。やがてゆっくりと立ち、「低気圧は中の気圧が低い、というのは空気が薄いことだな。」と自信なさそうに私の顔を見る。「そうだ、そこまでは正解、となるとどうなっていく。」と突き放す。こんどは立ったまま考え、沈黙のひとつきが続く、皆も吉田の答えやいかにと、待っている。またゆっくりと口を開き「中が薄いからには外が濃い空気か。すると外から中へ風が吹くのかな。」といかにも不安なようすで答える。「おう吉田っ、大正解だ。おめえさん兄ちゃんに似ねえで頭が冴えてんなあ。」には、兄の噂はうすうす知っている皆は、笑いながら大きな拍手をする。当の吉田はやれやれといった面持ちで席につく。

「さて、今までのをまとめると、台風は低気圧。低気圧は真ん中の空気が薄いので、まわりの濃いところから中へ風が吹いて同じ気圧になろうとする。」そこで話が変わって「地球は動いている。これは皆知ってんな。」にはうなづく。「どう動いてんのかなあ、こんどは秋間に聞こう。」「えっ、俺か。地球は東から西に動いてんに決まってるじゃんか。」には一部の者からくすくすと笑いがもれる。

「おい秋間、東から西に動くのは太陽と星だ。それはどっちも動かないのは、ガリレオ先生も言っている、となれば動くのは地球で西から東へと回ってる。そのためこのあたりでは、風は左回りにずれて吹き込む。」と話しながら図を書く。

「ラジオやテレビの台風情報は、遠い例が目立つ。今台風がどっちにいるかは、風を背にして左手の方向に中心がある。理由は図を見てよく考え、こんど台風が来たら風向きから中心を確かめな。」

## 神奈川県野生生物保護実績発表大会を見て

全国愛鳥教育研究会常務理事 平田 寛重

8月30日（金）に厚木市七沢にあります神奈川県立自然保護センターにおいて、神奈川県野生生物保護実績発表大会が行われました。

今年は、小学校のみ4校が参加しました。ここ数年神奈川のレベルは高く、全国大会においても上位の成績を修めているだけあって、今回の内容も、目を見張るものがありました。それでは、参加校4校の発表について、指導講評での内容も含め、紹介してみましよう。

最優秀賞になりました秦野市立西小学校では、知る、親しむ、護る、広めるの活動を学校及びPTA・地域にまで広げ、実践した内容でした。校内に自然教育のための多様なフィールドを設置したり、給餌台調査の結果から、鳥の利用が多い屋上にミニサンクチュアリを設けるなどの身近な場所での取り組みから、自然観察少年団を組織し、郊外に休耕田を借り、身近な水辺の生き物（ドジョウ・イモリ・ホタルなど）を同水系の川から移住させ、増やしなが、自然学習の環境作りに意欲的取り組んでいる点が評価されました。

次に、秦野市立東小学校ですが、この学校は、愛鳥活動の歴史も古く、豊かな自然環境を学習に生かした「せんだんタイム」の全校での取り組みにより、自然学習が月2回ほど、系統的なプログラムに沿って進められていました。その学習の中には、野鳥の学習も含まれ、ほとんどフィールドワークがメインになっています。全職員が直接学習プログラムの中で野鳥のことを教えていく例としては、東京の戸倉小や船橋小などの実践がありましたが、大規模校でのフィールドワーク主体の学習プログラムはこれからの時代の環境教育を考える上では、非常に先進的な実践をしているとの感想を持ちました。また、教師の月1回のフィールドワーク及び学習資料作成などは学ぶべき点が多いように思われます。

その次に、厚木市立荻野小学校ですが、この学

校も、愛鳥活動に取り組み、5年程の実績があり、発表大会への参加も多く、地味ながら継続性のある活動を続けている点が光ります。特に、昼休みに継続的に行われている縦割りグループによる近所の荻野川でのウォッチングがメインの活動になりますが、上級生が下級生に鳥のことを教えながら気軽に鳥と友達になっていくことが初歩の段階としてとても有効に機能していると思われました。やはり、愛鳥活動の基本は、「フィールドに出て野鳥を見る」この活動が最終的な自然保護の精神を培っていくバックボーンとなっていくことを実感しました。それは、委員会が発行している愛鳥新聞の中で、近くの山の造成工事のことについて、現場での取材をもとに失われゆく自然について、保護のことも含め、記事が書かれていた点などにも見られます。また、この学校は愛鳥活動プログラムが学校活動に無理がない範囲で楽しめるように組まれている点が印象に残りました。担当者の移動に活動が縮小するケースが多い現実の中で、地道ながら継続性を意識した活動は見習うべき内容と思われました。

最後に、川崎市立西野川小学校の活動が発表されました。この学校は教師の発表ということで、とても寂しい感じがしました。まだ、活動の歴史も浅く、野鳥を通した自然とのふれあいの部分で、内容としてはまだまだ頑張っていたかと思えます。しかしながら、校庭の隅から湧き水が出るという環境に恵まれていますので、多様な水辺環境を整え、それを含めた多様な環境を整備することにより、野鳥を含めた総合的な自然学習施設を整え、さらに学習プログラムのソフト面の充実をはかれば、将来がとても明るいものになってくるのではないのでしょうか。

以上、4校の活動発表について、紹介いたしました。他の都道府県でも神奈川県のように継続的な発表大会が実施され、愛鳥モデル校の質の向上が図られることを期待するものです。

# グリーン・マークを活用しましょう

全国愛鳥教育研究会常務理事 平田 寛重

原体験による感動の心が、人のパーソナリティの根底を流れ、自然保護の精神のバックボーンとなる。そして、それは、その人間の人と自然に関わる状況を判断していく基準ともなっていく。

原体験としての野鳥との関わりは、肉眼なり、双眼鏡・望遠鏡を通してなり、野鳥を間近に見ることによって培われる。

そこで、私たちは、いろいろな方法を工夫することになるわけです。野生の鳥を身近に見るためには、鳥たちを呼び寄せるための施設が必要です。鳥の食環境を考えて、なるべく多種の野鳥が来るように、水場や草地、は虫類や昆虫のための石積みや丸太や竹の束、土壌動物のための落ち葉や堆肥置き場……などを頭に描きながら設計していきます。その根幹を成すものが「木」です。実のなる木はもちろんのこと、葉や花などを利用する鳥や虫達もいます。また、生活科や理科の学習にも利用できるように色々な要素を考えて樹種を選んでいくことが必要です。

さて、この「木」をどう調達するかが問題になりますが、その解決の一つの方法として、「グリーンマーク」があります。これは、お金はなくても、多くの人の協力が得られれば目的を達成することができます。しかも、多くの人に「木」の大切さをPRすることもできるのもよいことです。野鳥と「木」の関係も紹介することができますし、それを通じて、緑の大切さや自然保護についても啓蒙していくことができます。

グリーンマークは、(財)古紙再生促進センターが行っている取り組みです。紙製品(ノート、トイレトペーパー、ティッシュペーパーなど)についているグリーンマークを集めて、事務局に送ると、それと引換に苗木券が送られてきます。その苗木券を最寄りの促進センターの指定業者に持っていけば、券に応じて相当額の苗木を交換してもらうことができます。なお、グリーンマークは、貼付台帳(下記連絡先に問い合わせると、グリーンマークの手引きと貼付台帳などを送ってもらえます。)に貼り、規定の点数(在校児童数に

応じて、点数が決められている。)を集めて、事務局に送ることになっています。

グリーンマークの収集活動は、委員会を中心として行い、児童会を通して、全校に協力を呼び掛けるのがよいでしょう。集会やTV放送などを通して、直接、全校にアピールすることもできますし、ポスターを貼ったり、収集ポストを作って各教室におかせてもらったりしてもよいでしょう。また、愛鳥だよりやPTA広報を通じて、家庭に呼び掛けたりもしましょう。そうして、集まったグリーンマークは、委員会の時間に台帳に整理して貼っていきます。その後、規定点数が集まったら、事務局に送って苗木券に交換してもらい、必要な「木」を植えて、環境を整えていくのです。なお、「木」の植え替えには適当な時期がありますので、その点注意が必要です。

また、収集活動の経緯や収集したマークによって植えられた「木」の紹介などを行い、お礼も兼ねて、次の目標に向けて再び全校にアピールしていくことも大切です。

## 《連絡先》

(財)古紙再生促進センター  
グリーンマーク実行委員会事務局  
〒104 東京都中央区銀座2丁目16番12号  
銀座大塚ビル内  
電話 03-3543-1470



# インフォメーション Books 愛鳥教育・環境教育に参考になる雑誌

全国愛鳥教育研究会常務理事 杉浦 嘉雄

今回は、文一総合出版「日本の生物」（月刊誌、1991年6月号からは「B I R D E R」と改名し、野鳥専門誌となる。）に関して、最近の号を中心に紹介したい。

## ●「日本の生物」

### 1990年12月号／特集ウトナイ湖の生物

日本の代表的なバードサンクチュアリである北海道ウトナイ湖の生物相を、野鳥はもちろんのこと、昆虫・植物などを総合的に紹介している。探鳥地ウトナイ湖の基礎資料としては最適である。また、各地域での生物相のまとめ方の一つのサンプルとなるであろう。

### 1991年2月号／特集DUCK WATCHING

愛鳥教育の導入にふさわしい代表的な野鳥は、冬鳥のカモ類である。そのカモ類の見分け方や行動や分類のエピソードなどを美しい写真入りで紹介している。カモウォッチングの基礎資料となる。また、連載の「識別のための基礎知識」「鳥類の形態と識別」は、鳥類学の形態の基本をマスターするにふさわしい教材といえる。

### 1991年3月号／特集タカ。森に生き空をかける。

野鳥の識別で悩まされるワシタカ類、特にここではハイタカ属3種、オオタカ・ハイタカ・ツミの詳細な比較、見やすい飛翔の比較図などがある。ハイタカ属の識別の基礎資料になる。

### 1991年4月号／特集身近な鳥を探る。

愛鳥教育は、野鳥の識別だけでなく、野鳥の行動や生態、それらの背景にある環境について理解し、環境の保全のために子供たちが自ら考え行動していくことが一つの目標といえよう。それには、身近な野鳥のエピソードが適切な教材となり得る。

この特集は、都市鳥などの身近な野鳥を環境との関わりで行動や分布を見ていくという興味深い教材となる。特に、誰にでも観察できる身近な冬鳥の代表ジョウビタキに関する詳細でやさしい佐

藤氏の解説が目を引き。さらに、茂田氏の「鳥類一形態と識別」もジョウビタキがテーマになっており、ジョウビタキに関する基礎資料となる。

### 1991年5月号／特集サギはなぜおもしろい？

身近な野鳥であるサギ類全般の見分け方、形態や生態、サギ類の調査方法の基本についてはもちろんのこと、シラサギはなぜ白いのかなど、興味ある話題も掲載されている。サギ類調査には欠かせない一冊といえよう。

## ●「B I R D E R」

### 1991年6月号／特集

#### 訪ねよう！渡り鳥のメッカ能登・加賀

石川県は、春や秋の渡り鳥の重要な経路に当たっている。大陸系の種が見られる舩倉島、ワシタカ類の宝庫といわれる河北潟、ガン類が間近に見られる片野鴨池（サンクチュアリで有名）など、個性豊かな探鳥地が紹介されている。その中でも、チュウヒについての「河北潟のチュウヒウォッチング」は、チュウヒ観察の基礎資料となる。

### 1991年7月号／特集北シベリアの鳥

日本では珍鳥・迷鳥といわれる鳥が載っている。愛鳥教育の視点からは、オナガガモやスズガモ、ムナグロ、ベニヒワなどの冬鳥の繁殖の紹介が興味をそそられる。さらに、バードニュース「東京農工大におけるヒヨドリの個体数変動」など、比較的身近な野鳥に関する情報も愛鳥教育にとっては興味ある資料になる。

### 1991年8月号／特集夏の海鳥

代表的な海鳥アホウドリ、オオミズナギドリ、カツオドリなど、名前は知られていてもその生態がなかなか知られていない海鳥について、非常に分りやすく解説されている。また、海鳥の飛翔の特徴についても理論的に分りやすく解説してある。

## 事務局日誌

全国愛鳥教育研究会常務理事 岡本 嶺子

6/10 (月)		
37号編集会議	渋谷 J A P B	2名
6/15 (土)		
37号編集会議	渋谷 J A P B	2名
6/16 (日)		
37号編集会議	渋谷 J A P B	3名
6/28 (金)		
常務理事会	渋谷 J A P B	8名
7/24 (金)		
北海道研修会打ち合せ	渋谷 J A P B	8名
8/5 (水)		
研修会打ち合せ	札幌	13名
8/6 (木)		
夏期研修会	ウトナイ湖 Y . H .	30名
8/7 (金)		
夏期研修会	野幌森林公園	30名
9/27 (金)		
常務理事会	渋谷 J A P B	8名

## 編集後記

皇居の堀端へヒガンバナを見にでかけた。ここには、白い色をしたヒガンバナがあるので、今年も行ってみようということになって、小雨の中をでかけた。以前見た時より時期が少し早かったようだったが、白いヒガンバナは咲いていた。

図鑑によると、ヒガンバナ科ヒガンバナ属ヒガンバナ マンジュシャゲ 通常は花は赤色、黄赤色か紅紫色、稀に白色。この場合は、花被はひどく反り返るとある。

ヒガンバナを見ながら堀端を桜田門に向かって歩いていると、ツユクサの白い色をした一叢を見つけた。私にとって白い色のツユクサは、初めてだったので珍しく、やはり図鑑で調べてみた。

花卉の2個は大きくほぼ円形で青色、時に白花または薄藍紫色の花を開くものがある。

花の色に限って言えば、どちらかと言うと白い色の花が好きなので、この白い色のツユクサが、来年もそこに咲いていることを願っている。

(岡本)

## 「愛鳥教育」No.40の会員からの活動記録の投稿についてのお知らせ

全国愛鳥教育研究会事務局

総会の事業計画でも触れましたが、「愛鳥教育 No.40」で会員の活動記録を取りまとめる予定でおります。

この企画の主旨は広く会員による愛鳥教育の実践活動を紹介し、会員同士の情報交換や本会の活動の活性化を図ることです。

内容については、愛鳥活動の実践記録が主で、学校全体の活動から、学年、クラス、クラブまたは、国語の授業や生活科の取り組みなどいろいろな考えられます。学校ばかりでなく幼稚園や公民館、子供会や自治会などでの活動などもあったらユニークなものができあがると思います。小さな活動でも結構です。継続すれば力になります。また、みんなと手をつなぐことも力になります。奮って投稿ください。

締切は本年12月末日までということにします。送り先は全国愛鳥教育研究会事務局までです。不明な点がございましたら、事務局までご連絡ください。

愛鳥教育 No.38

平成3(1991)年10月31日

発行人	江袋島吉
発行所	全国愛鳥教育研究会
住所	〒150 東京都渋谷区宇田川町37-10 麻仁ビル渋谷503 (財)日本鳥類保護連盟内
電話	03-3465-8601 FAX 03-3465-8602
会費	3,000円
郵便振替	東京8-12442
印刷所	祐文社

# 愛鳥クイズ

## 前回の解答

左上：ムギマキ　右上ホオジロ　左下：ミコアイサ　右下：ケイマフリ

なお、前回の問題は、日本野鳥の会広島支部報「森の新聞」No.33を参考にさせていただいたことをおことわりしておきます。

さて、今回は、フィールドポイントにもなる広げている時の翼の白い模様を調べてみましょう。わりとよく見られるスズメ目の鳥にしてみました。実際の色や模様は複雑ですが、簡略化して色も白黒にしましたので、その旨ご承知おきください。図鑑で調べて、考えてみてください。

